

わたしたちの鶴川

—野津田・小野路を中心に—



平成元年3月

創立八十周年記念誌

町田市立鶴川第一小学校



八十周年記念誌



鯉が泳ぐ玄関前の池(48.5)

1988. 10. 21

町田市立鶴川第一小学校

郷土史の発刊を祝して……町田市教育委員会教育長 寺田和雄	1
創立八十周年を迎えて……鶴川第一小学校長 北澤正直	1

学校のあゆみ (年表)

1 鶴川第一小学校のあゆみ	2
1 これまでの主なあゆみ	7
2 鶴川尋常高等小学校とよばれたころ	12
3 鶴川国民学校とよばれたころ	15
4 鶴川小学校とよばれたころ	20
5 鶴川第一小学校となつて	23

二 鶴川地区のうつりかわり

1 大むかしの鶴川	27
2 鎌倉街道のできたころ	30
3 にぎやかな小野路の宿	34
4 野津田で自由民権運動がさかんだったころ	40
5 戦争と鶴川	44
6 村から市へ	50

三 小野路・野津田の地区めぐり

1 古道・旧道	56
2 地名のいわれ	58
3 おもな史せき	59
4 みんなのしせつ	68
6 年中行事	70
7 民話・伝説	74
8 学区の産業	78
9 のこしておきたい貴重な草花	85

おめでとう八十周年

○ 本校の教育目標と校歌	89
○ 校旗・校章	90
○ 学校の一年(昭和六十三年度)	91
○ 創立八十周年行事	92
○ 本校PTAのあゆみ	93
○ 本校の職員	96
○ 資料提供及び協力者と主な参考文献	97
○ 監修者及び執筆者・あとがき	98

郷土史の発刊を祝して

教育長 寺田和雄

鶴川第一小学校創立八十周年を記念する「郷土史」の発行、おめでとうございます。心からお祝い申しあげます。

今、国際化の時代といわれ、学校はもとより、日本の社会の隅々までが国際化を求められています。そのためには先ず、自国の、そして自分たちの郷土の歴史や文化をしっかりと学び、知ることが大事だと私は考えております。

私は、町田地方の歴史や文化を考えると、鶴川という地区がきわめてユニークで、しかも、ひととき多彩であることに注目しております。自由民権運動などもその代表的な例です。

また、室町時代、世阿弥の作といわれる謡曲「横山」には、鶴川の小野路に本領をもつ横山十郎清尚(小学館の日本国語大辞典には治直とある)という武士が登場します。ひとかどの鎌倉武士でしたが、零落して、この多摩の草深い地に妻と不遇な生活を送っていました。しかし、時に吉野の鷹狩りの勇壯を語り、舞をたのしみ、妻や鎌倉の女人からも慕われるという、まさに心ににくい風流びととして描かれております。

もちろん、世阿弥が構想した仮空の人物ではありますが、およそ粗野の代名詞のような関東武士のなかから、このような風雅な人物を、しかも「多摩の横山」といわれた山深いこの地に設定したとりあわせの妙が、私にはとても面白いと思えるのです。ことによると世阿弥は、この地方をとて奥床しいところとして考えていたのかも知れません。愉快です。

創立八十周年を迎えて

校長 北澤正直

記録によれば、野津田・小野路・大蔵・金井・三輪の各地区にあった五つの尋常小学校と明治二十九年二月に開校した、鶴川高等小学校が合併して、明治四十一年四月一日、鶴川尋常高等小学校が創立されたとあります。創立以来いくたびか校名は変わりましたが、本年度創立八十周年を迎え盛大な祝う会がおこなわれました。

ひと口に八十年といいますが、この間に一万一千人近くの方々が卒業され、それぞれ大活躍をされています。創設期から本校の教育活動の推進に直接たずさわってこられた歴代校長をはじめ、教職員の方々のご苦心の数々が込められた実に尊い八十年の歲月です。また、おらが学校として、昔の鶴川村、今の町田市など、地域の方々、PTA、同窓生の皆々様の温かい慈しみの心と伝統を築く並々ならぬ、ご努力に支えられた八十年でもあります。

この記念すべき本年。校舎の大規模改修工事をはじめ、PTA主催のバザー・記念講演会。また、周年行事の一つとして、全教職員の手と足によってこの郷土誌を作成しました。このねらいは、八十周年を機会に改めて学校・地域の歴史をふり返り児童が郷土鶴川について学び、鶴一小や郷土を愛し、郷土に誇りを持つ心と態度を育てる資料にしたと願うからです。

ご指導ご協力を賜りました方々に厚くお礼申しあげますと共に、私ども教職員一同心を新たにしてい層邁進し続けます。

学校のあゆみ

〈創立前の鶴川の歴史〉

〈小野郷学〉

明治四年、学制がしかれるに先がけて、小野路万松寺に小野郷学という学校が創立された。この学校は、小野路の橋本政直、小島為政の二人が中心となり、石坂昌弘、中溝昌弘、若林有信、井上富教等の先覚者がこれに協力し後進の指導にあたった。生徒教一二人。

〈尋常小学校〉

明治五年学制がしかれるとともに閉鎖されたが、学校というものを知らなかった時代に郷学をつくったことは三多摩教育史上画期的なことであった。明治五年学制がしかれるとともに、村内の各地区（小野路、野津田、大蔵、金井、三輪）に五つの尋常小学校（真光寺、能ヶ谷に分校）がつくられたが、その創立起源についてはあきらかでない。高等小学校が創立されたのは、明治二十九年二月で、大蔵安全寺を仮校舎として開校された。校長神藏幾太郎、生徒数一六九名。

〈鶴川高等小学校〉

明治三五年現在の鶴川中学校の位置に校舎完成。この頃の学校は義務教育は小学四年で、高等小学校への進学は自由であった。合併のころの義務教育

は六ヶ年に延長され、高等科が二ヶ年になった。

明治四一年 四月 一日

四一・四・一〇
四二・一〇・六
四四・三・三一
大正一一・四・一
昭和 三・一一・

四・六・一
七・一〇・一〇
一五・一一・一二
一六・四・一
一六・九・五
一九・一〇・二三
二二・四・一
二二・四・一九
二四・八・三〇
二六・一一・二七
二七・二〇・一
二九・七・三〇
三三・二・一
三三・三・一五
三四・四・一
三七・四・一

村内の五つの尋常小学校と一つの高等小学校を合併し鶴川尋常高等小学校が創立され小野路に第一分校、三輪に第二分校をおく。
初代 村野喜十氏校長就任。
校舎の修増築完成、開校式挙行。
第二代 市川嘉七氏校長就任。
二教室増築。
校門前の石段をつくる。
五教室増築。

第三代 矢部昌治氏校長に就任。
第四代 若林健氏校長に就任。
鶴川国民学校と改称。
第五代 井上幸知氏校長に就任。
第二分校焼失 妙福寺にて授業。
鶴川小学校と改称。(二六・二制施行)
第六代 畠山肇氏校長に就任。
第二分校々々舎落成。
三教室と職員室新築落成。校歌ができる。
第七代 守屋長雄氏校長に就任。
明治四二年増築校舎を改築、五教室と図書室落成。
町村合併により町田市立鶴川小学校と校名変更。
創立五〇周年記念式典挙行。
第八代 平信義氏校長に就任。
第九代 増田春平氏校長に就任。



昭和41年5月16日 本校舎・六角校舎落成



S. 26. 11. 27 に落成された校舎
当時すでに大木になっていた正門の桜



名物の石段

昭和三八年 三月二十九日

町田市立学校鶴川地区共同調理所開所式
学校給食開始。

三八・四・一七

三九・二・二〇

三九・三・三一

三九・四・一

第二三分校廃止。
鶴川第二小学校発足により鶴川第一小学校と校名変更。

四〇・五・一

四〇・四・一

四一・五・一六

四四・四・一

四四・七・三二

四六・三・三一

四七・三・二〇

四七・五・二六

四七・一・二〇

四八・二・二〇

四八・三・三一

四八・四・一

四八・五・五

四八・二・三一

四九・一・一

四九・二・二六

五〇・五・三一

五〇・七・一

小野路分校を小野路分教場とする。
新校舎造成工事始まる。

第一〇代 土志田暁氏校長に就任。

新校舎落成、入校式挙行、小野路分教場廃校。

第一一代 山下庄市氏校長に就任。

プール完成。

西校舎落成。

体育館落成。

体育館落成式。

石油保管庫完成。

放送室完成。

新設校藤の台小へ児童二一五名転籍。

第一二代 浅沼武男氏校長に就任。

玄関前池完成。(伊師実氏寄贈)

浅沼武男校長退職。

第一三代 中島典高氏校長に就任。

校門扉、六角校舎非常階段完成。

体育倉庫完成、各昇降口のイボタイル、六角校舎前防球網完成。

東校舎完成(普通教室六、保健室、視聴覚室、図

書室)

校舎裏東側にフェンス完成。

プレハブ校舎撤去。

本校舎内部塗装完了。

本校舎ベランダ手すり塗装完了。

東門および扉新設。

新設校金井小へ児童一七名移籍。

第一四代 三澤秀雄氏校長に就任。

プール循環浄化器新規設置。

創立七〇周年記念航空写真撮影。

プレハブ二教室建設(六角校舎南側)

給食調理室建設工事開始。

新設校大蔵小へ児童三二一名移籍

給食調理室、物置き倉庫完成。

自校給食開始。

六角校舎改造工事完了(内階段撤去)

プレハブ二教室撤去。

第一五代 谷川和夫氏校長に就任。

第一六代 森豊次氏校長に就任。

創立七十五周年記念航空写真撮影。

ミニ・バスケットコート完成。

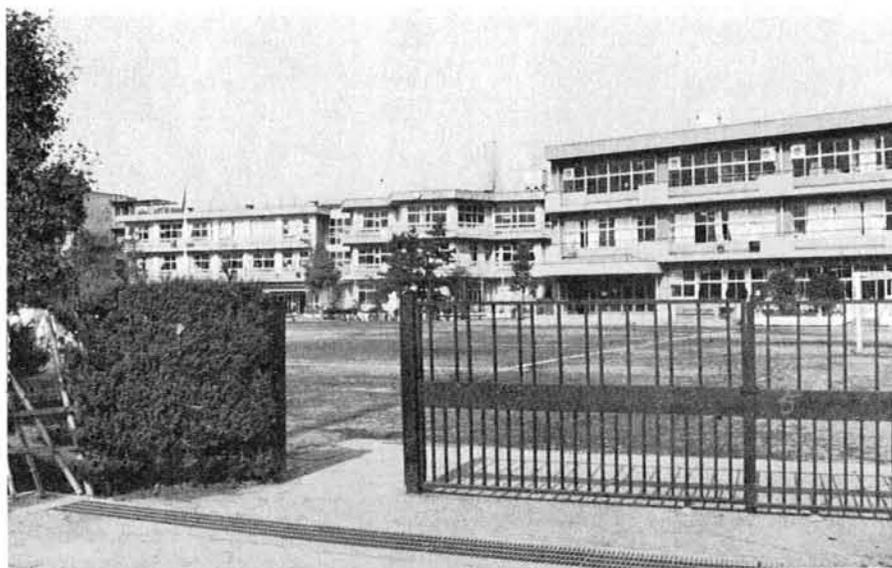
都連合学芸会 四年劇「はだかの王様」出演

(児童会館)

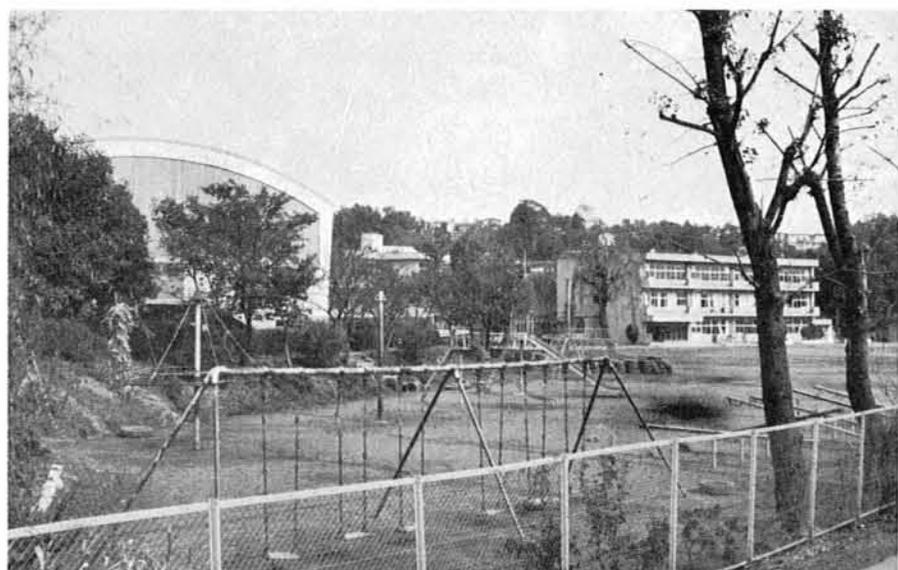
創立七五周年記念誌発行。

- 五〇・七・二五
- 五〇・七・三一
- 五〇・八・三〇
- 五一・八・三一
- 五二・三・一五
- 五三・三・三一
- 五三・四・一
- 五三・六・二二
- 五四・二・一〇
- 五四・四・二
- 五四・六・一
- 五五・四・一
- 五五・四・一六
- 五五・四・二八
- 五六・八・三一
- 五六・二・二五
- 五六・四・一
- 五六・一・一六
- 五八・六・一
- 五八・一・三〇
- 五九・二・三
- 五九・三・一五

校庭よりのぞむ校舎



校庭の南西よりのぞむ体育館・校舎



昭和五十九年 三日三〇日 正門坂道、舗装完成。

六〇・三・三〇 正門坂道、給食室周囲舗装、放送設備工事完了。

六〇・三・三一 プール更衣室改築、プール塗装完了。

六一・四・一 第十七代校長 北澤正直氏就任。

六二・四・一五 上水道外部配管修理。

六二・七・二一 大規模改修工事（六角校舎）

六二・一一・二五 西校舎昇降口前、舗装工事。

六三・七・二一 大規模改修工事（二年次）
（中央校舎、西校舎、通路部分）

六三・九・一九 創立八十周年記念、航空写真撮影。

六三・一〇・二一 創立八十周年を祝う会挙行。

平成元年 三・二〇 創立八十周年記念副読本発行。

一 鶴川第一小学校のあゆみ

1 これまでの主なあゆみ

明治の初めまで、小野路・大蔵・能ヶ谷等の村には、村役人や、僧侶が、自宅で、読み、書き、（習字）そろばん、を教える寺子屋や学問を教える私塾がありました。しかし、通えるのはほんの一部の、ゆうふくな家か、役人の子だけで、大部分の村人は、一生字を知らずに終わりました。

明治四年（一八七一）、野津田村の石阪昌孝や、小野路村の小島為政、橋本政直らの働きで、野津田村・華厳院に小野郷学という学校ができました。

今の学校とちがい授業は、月に六日間、場所も華厳院（野津田村）、大泉寺（下小山田村）、万松寺（小野路村）、南仙堂（凶師村）の四ヶ所を二、三ヶ月交代で順番にまわりました。生徒（約百五十名余り）は、この四つの村から入学する人が多かったのですが、通学の公平を考えたのでしよう。しかし、中には日野、府中、鉄（現横浜市緑区）、小川等の遠くから入学する人もあり、日帰りができないので、小野路に下宿をして勉強する人もいました。生徒は十四才から二十五才の人が多かったのですが、九才から六十六才まで、様々な年齢の人が集まり、三十才や四十才でも、はじめて勉強を教わる人が大部分でした。出席者は、

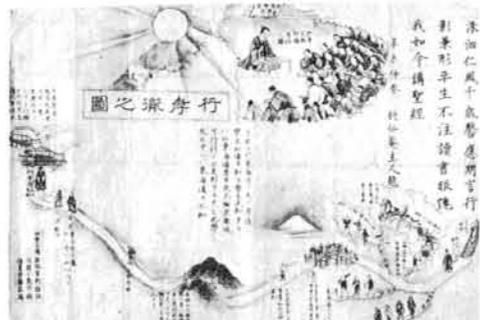


(創立80周年)鶴川第1小学校全景

ふだんは八十名ぐらいでしたが、蚕のいそがしい時期には、十数名になる時もありました。生徒の多い小野路や野津田の村でも、入学できたのは、十軒のうち、一軒か二軒でした。月謝は無料でも、家が貧しく、生活のために働かなくてはならず、学校へは、行きたくても行けない人がほとんどだったのです。又、女子は、ひとりもいませんでした。先生は、村の学者や、寺子屋の先生だった人たちで、習字、算術、歴史、漢文、等を教えました。小島為政は、そのころ村の若者たちに、夜遊びやかけこたがはやった事を心配し、孝行道の図などを使って、人の正しい生き方を教えることによって、よい村にしようと努力しました。郷学は、明治六年まで続きました。



小野郷学の教科書



小野郷学の授業風景（「孝行道の図」より）

〈村々に小学校ができる〉

明治六年、郷学校を作った人々の努力で、鶴川の各村には、左のような小学校（小学舎とよんだ）ができました。これらの学校は、国の方針により各村々がいっせいに作ったので、最初は、校舎の建築も間に合わず、各村の寺院に間借りをしてスタートしました。

- (明治六年の校名) (場所)
- 小野小学舎 小野路村 (万松寺)
 - 智新小学舎 野津田村 (華厳院)
 - 育英小学舎 大蔵村 (安全寺)
 - 共研小学舎 金井村 (弘福寺)
 - 励精小学舎 真光寺村 (観泉寺)
 - 研精小学舎 三輪 能ヶ谷 上村 (高蔵寺)

この小学校は明治四十一年まで続きますが、この間、世のうつり変りと共に学校名、場所、勉強の内容、期間など、つぎつぎと変わりました。

校舎を作る費用や、先生の給料等、すべてが村の費用だったので、当時の村の人たちには、大変な負担でしたが、新しい時代に、学校がどんなに大切なものか、と考えた村人たちの努力と熱意で、最初、村の子どもの半数ぐらいだった入学者も、明治三十三年頃には、十人中八人ぐらいが入学する様になりました。



明治6年開校時の各学校の位置

〈鶴川高等小学校〉

明治二十九年、大蔵・安全寺を仮校舎に、鶴川高等小学校ができました。この頃は、尋常小学校（四年間）が義務教育で、高等小学校（二年間）へ進むのは自由でした。高等小学校は男女別クラスで、この年百八名（内女子約二十名）が入学しました。明治三十五年、今の鶴川中学校の場所に校舎ができました。

（鶴一小のたん生から現在まで）

明治四十一年四月 村内の五つの尋常小学校（二つ分校）鶴川尋常高等小学校 と一つの高等小学校を合わせてできた小野路第一分教場 義務教育は六年間（尋常科）男女共三輪 第二分教場 ほぼ全員就学。十四学級（内、分校二学級）七三五名が入学。翌年校舎完成名前がかわる。第二次世界大戦始まる義務教育六年間（初等科）

昭和十六年四月 鶴川国民学校 第二分教場もえ、妙福寺で勉強をする

昭和二十二年四月 鶴川村立鶴川小学校 小中九年間、男女共学。第二分校校舎できる。校歌できる。

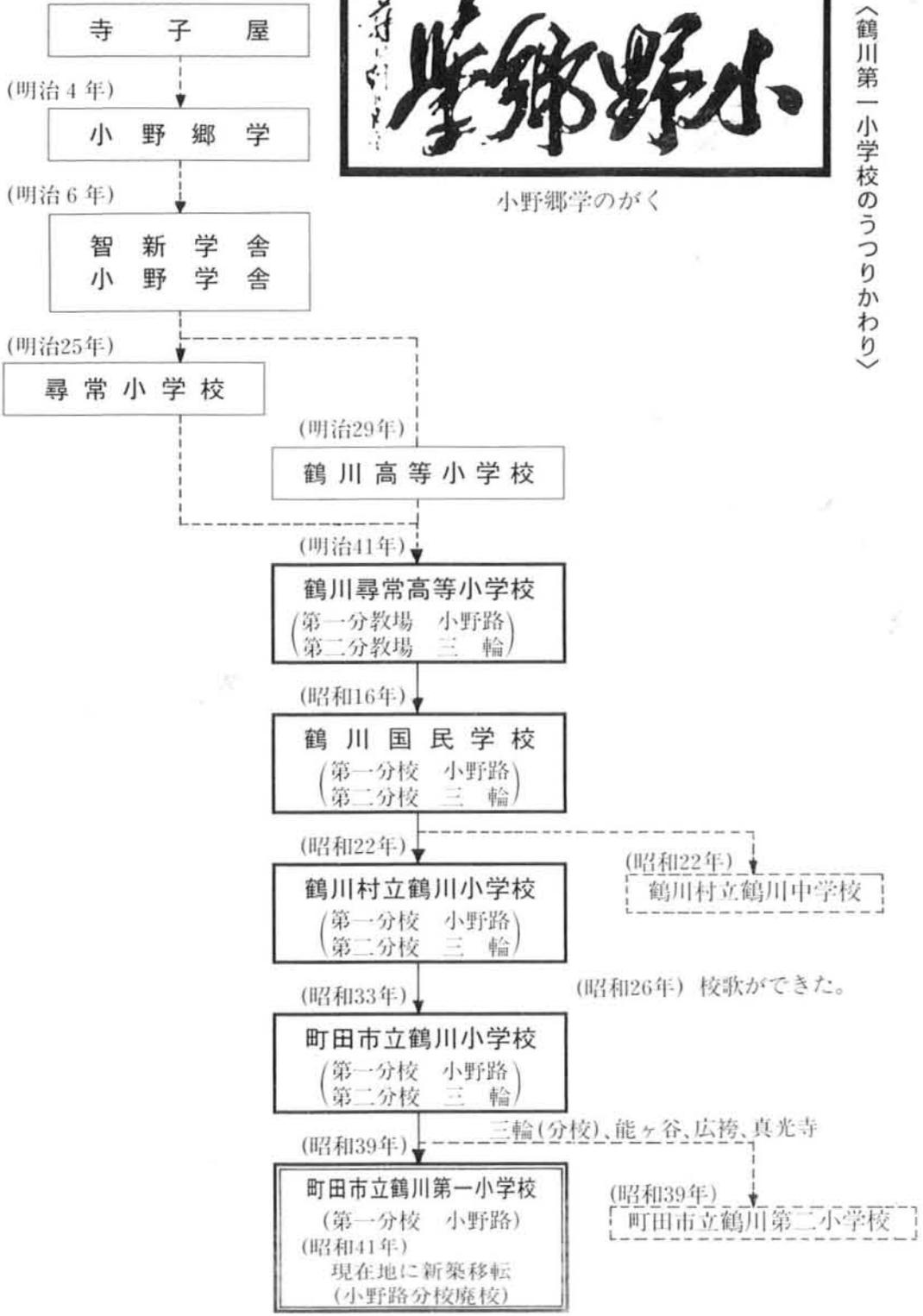
昭和三十三年二月 町田市立鶴川小学校 村立から市立となる。三十四年創立五十周年を祝う。三十八年給食始まる。

昭和四十一年四月 今の中学校の場所から現在の所へ移る。町田市立鶴川第一小学校

〈鶴川第一小学校のうつりかわり〉



小野郷学のがく



2 鶴川尋常高等小学校とよばれたころ

(おじいちゃん、おばあちゃんの子どものころ)

〈学校でのこと〉

そのころ、鶴川のあたりには、まだ田んぼがたくさんありま
した。その田んぼの道を、歩いたり、自転車で乗ったりして、
学校へ通いました。

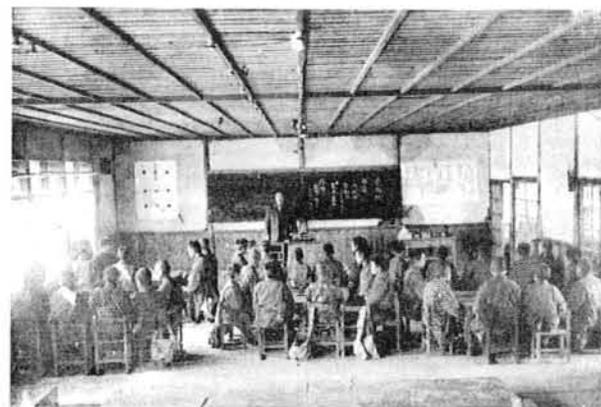
毎朝、校庭で朝礼があり、
整列して、校長先生のお話を
聞きました。

先生は、ほとんどが男の先
生で、女の先生は、たった一
人、さいほうを教えてくれる
先生がいただけでした。

一クラスは、六十人。男子
のクラスと女子のクラスに分
かれていて、げた箱なども、
男女べつべつになっていまし
た。



朝 礼



高等科第二学年理科授業

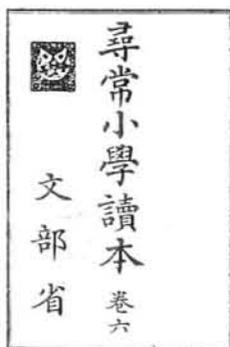


バスケットボール

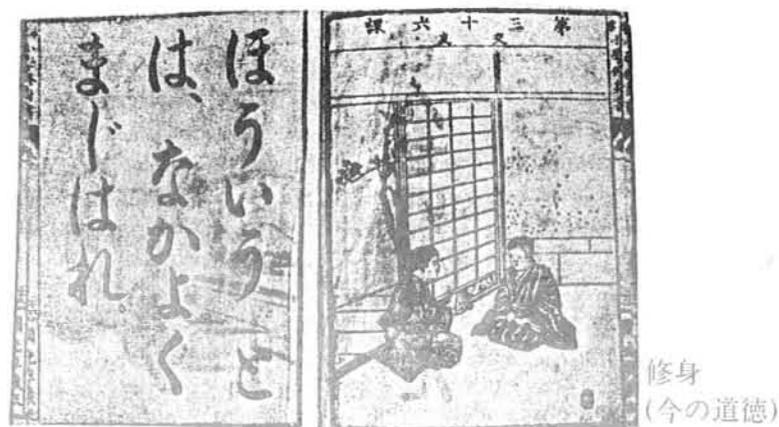
服装も、みんな着物で、女の子は、髪の毛をおだんごにゆっ
ていました。靴をはいている子もいましたが、ゲタやぞうりを
はいている子が多かったです。

授業は、毎日、五時間か六時間あり、一週間に一回、そろば
んの勉強がありました。そろばんで、かけ算やわり算の練習も
しました。小学校三年になると、「教育勅語」を暗記させられ
ます。なかなか覚えられなくて、毎日毎日、練習をして、とて
も大変でした。

大正のころの教科書



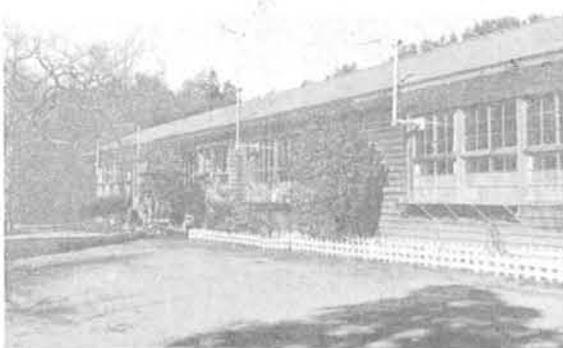
読 本



修身
(今の道徳)

休み時間になると、校庭に出て、友だちとドッジボールをし
たり、バスケットボールをしたりして遊びました。
そのころ、このあたりでは、かいこを飼う家が多く、五月の
終わりから六月にかけて、二週間の「かいこ休み」がありまし
た。みんな、家のかいこの世話を手伝うので、学校が休みにな
るのです。

小野路の人は、尋常小學校四年までは、分教場で勉強をしま
した。五年になると、今の鶴川中学校のある場所に建っていた



鶴川尋常高等小学校



小野路分教場

鶴川尋常高等小学校へ通います。

そのころは、給食などなかったもので、お弁当を持って来ましたが、家の近い人などは、家へ帰って食べてくる人もいました。学校の小使いさんが、みんなに、お茶を配ってくれました。

チャイムもなかったもので、時間になると、小使いさんが、大きなかねを手に持って、カランカランとかねを鳴らして、合図をしてくれました。



(時間を知らせた「振鈴」)

〈家でのこと〉

家に帰ると、よく友だちと、「陣とり」や「兵隊ごっこ」をして遊びました。

お小使いももらっていましたが、お店もなく、ほとんど使うことはありませんでした。

そのころの買物物は、近くにある、何でも売っている店へ行きました。買物物をして、お金は払わずに、お店にある帳面に記入しておき、一年に二回、まとめてお金をはらいます。

尋常科では、六年間勉強をするのですが、中には、家の都合で、四年くらいでやめて、働きに行く友だちもいました。

尋常科を六年で卒業すると、今度は、高等科で二年間勉強を

3 鶴川国民学校とよばれたころ

〈戦争のはげしかったころ〉

昭和の初めころから、日本は中国と戦争して、中国の一部を日本のものにしてしまっていました。世界中の国々の反対にあつたのでそれらの国々と戦争をする準備を始めました。

そのような時代に、鶴川尋常高等小学校は、昭和十六年四月、国の方針で鶴川国民学校と名前がかわりました。

初等科は六年、高等科は二年でした。

そして、同じ年の十二月



外号を伝える戦争開戦

八日、日本はアメリカやイギリスなど多くの国と戦争を始めました。これが、太平洋戦争です。

そのために、国民学校に行っていた子どもたちは、今の子どもたちとくらべ、大変くろうをしました。



尋常科男子卒業生 (共一)



尋常科女子卒業生 (共二)

します。でも、高等科へ行くには、一か月に二十五銭もいるので行きたくても行けない人が、何人もいました。

そのあと、補習科というのが二年あり、これは、田んぼや畑の仕事が暇になる、秋から三月ごろにかけて、夜、勉強をしました。雨が降って、畑仕事ができないと、昼間の授業にかわります。女子は、さいほうの勉強をしていました。

〈遊び〉

戦争の初めころは、タコあげやコマまわし、ドジョウすくい、正月のはねつきなどを楽しみました。しかし、日本が負けそうになり、空しゅうが始まると、外での遊びができなくなってきました。そこで、近所の人と家の近くやなかで遊ぶようになつてきました。

〈お手つだい〉

戦争が始まると、お父さんやおじさんなどの働く人が兵隊として出かけていた家が多かったので、子どもまで、だじじな働き手としてがんばっていました。

〈学校行事〉

空しゅうが始まる十九年になると、運動会や学芸会なども行なわれなくなってきました。楽しい思い出がなくなってきたのです。

遠足は十九年にはしていませんが、二十年はやっていません。

しかし、戦争が終わった年の十月に運動会、三月に学芸会をやっています。展示会も高等科だけです。十二月にやっています。日本中が、食べ物や着る物ばかりでなく、住む家さえない人が多かったころ、これらの行事ができたのはしあわせだったと思います。



初等科三年男子クラス 昭和19年

〈服そう〉
 写真を見ると、十七年ぐらいいまではスカートや和服が目立ちます。男の子は学生服にたひょうじゆん服が目立ちます。しかし、十九年になると、女の子は長そでにもんぺ、男の子は長ズボンになっていきます。五年生以上の人は戦闘ほうをかぶっていました。
 学校にはいていくものも、ワラゾウリや竹ゾウリがほとんどになってきました。ゾウリは、高学年になると自分で作ってはいいた人も多くいました。雨の日や雪の日は、ぬれたりしてとてもこまりました。
 防空ずきんをかたにかけて学校に通いました。

〈勤勞ほうし〉

一人一人が自分でやるお手伝いのほかに、勤勞ほうしというのがありました。高学年や高等科の人が、近所の働き手の少なくなった農家の作業を手伝いに行きました。そのほか、服の材料としてのくわの皮やでんぶんをとるためにどんぐりの実などを学校に持っていきました。また、かきの葉を集めて、ビタミンCをとる手伝いもしました。

〈見おくり・出むかえ〉

見おくりは兵隊に行く人のために、出むかえは戦争でなくなった人のために、どちらも鶴川の駅まで行きました。高学年や高等科の生徒が多かったようですが、四年生以下の人も何度か参加しています。また、自分のお父さんやおじさんを送った人も多くいました。
 国民学校の男の先生も多く兵隊になっています。そして、かわりに若い女の先生がそのクラスの先生になっています。

〈防空こう〉

空しゅうにそなえ、高学年や高等科の人が中心になってほりました。当時、小学二年生の人の話では、自分達が入る防空こうは、自分達でほったそうです。

〈二部授業・青空教室〉

昭和二十年四月、兵隊が本校と小野路分校に来ました。そのため、教室が足りなくなり、二部授業が行なわれました。二部授業とは、同じ教室をちがう学年で使うため、時間をずらして行なう授業のことです。これは、本校では戦後一年続きました。また、戦後の本校では青空教室といって、校庭



ほかの学校の青空教室

の木の下で授業をしたこともあるそうです。

〈夏期たんれん期間〉

そのころ、夏休みのことを夏期たんれん期間といっていました。十九年には、夏季授業を行なわさる日と行っていました。高学年や高等科の人は、でむかえや学校農場の作業、校舎のそうじなどがあり、あまりのんびりできませんでした。



空しゅうのあとの下町

二十三年三月十日の東京大空しゅうや八王子の空しゅうでは、もえる火が鶴川からも見えました。また、夜の空中戦で飛行機が火の玉のようになって落ちていくのも見えませんでした。パイロットの顔が見えるほど近くにきて、機じゅうをうったこともありましたが、ある時女の先生二人が機じゅうにうたれ、柿の木にのぼってかくれてにげたことさえ

ありました。
 授業中、けいぼうがでると、授業をやめてすぐひなんしたり、場合によっては、地区別にわかれて、下校しました。
 空しゅうは夜が多かったので、ねる時にもまくらもとに、ふくと防空ずきんをおいていました。



昭和十七年（初一女子50名）

〈そかい〉
空しゅうがあつて、きけんなどところにいる人たちが、まだ安全な鶴川に、お父さんやお母さんのしんせきをたよってひなんしてきました。それを、そかいといいます。

また、品川区の鈴ヶ森国民学校の初等科の三、六年生までが、集団でひなんしてきました。
その人たちが各クラスに何人も入ってきたので、一クラスの人数がかなりふえました。



昭和十九年（初三女子66名）

いのかこまりました。
その後、くばられた教科書は、今のようきれいな本になっているのではなく、自分できつて、ひもでとじて本にしました。ある時、アメリカ兵が何人も学校にきたので、本当にびっくりしました。連合軍の出した命令が守られているか、調べにきいたのです。

二年後、六・三制といわれる制度ができ、小学校六年、中学校三年間の義務教育となりました。鶴川国民学校は、鶴川村立鶴川小学校と名前をかえ、新しい出発をしました。中学校は校舎ができるまで、小学校の一部をかりて授業をしました。



教科書にすみをぬる（昭和20年9月）

〈終戦〉
昭和二十年八月十五日、日本は戦争に負けました。
子ども心に、ホッとしたことや、空が静かになったことをおぼえています。

今まで使っていた教科書が使えなくなったり、スミをぬったりしました。教科書によってはほとんどスミでけされ、先生も子ども達も何をどう勉強してよ

そのころの先生の思い出

私が初めて教だんにたったのは、戦争が日に日に負けいくさとなる昭和二十年四月、所は下三輪妙福寺の本堂の一部でした。昭和十九年十月二十三日に鶴川国民学校第二分校は、原因不明の火災のため焼失したための仮教室だったのです。

うす暗い本堂に一・二年生五十五人、別棟の祖師堂に三・四年生三十余人それぞれ複式学級でした。

子ども達の机は、りんご箱やみかん箱で、畳の上にならべられてあるだけでした。

教具といえば、黒板一枚とチョークぐらいで、オルガンもない寺子屋のような学校でした。

本堂のうらの方には、集団疎開による鈴ヶ森校のすいじ場がありました。

徒競走の練習の日でした。木の枝の先を使って、スタートラインをひきました。石灰もラインひきもなかったからです。

全員が走り終わる頃でした。
空しゅうけいほう発令!

町内の火の見やぐらについているサイレンがなりひびきました。
「あ・空しゅうだ。」

だれかの声に、子ども達の顔は一しゅんにして緊張にあふれました。私の指示を待つ間もなくあわてて本堂の中に走って行きました。すぐ下校の用意をさせました。いち早く防空ずきんをかぶり、ふろしきや手づくりの袋に道具を入れて帰る準備をしました。姉や兄が三・四年にいる子はいっしょに帰るように指示しました。さようならのあいさつもそこそこに、子ども達は家へと急ぎました。

子ども達が家についたかどうかと思う頃、米軍機のB29と思われる飛行機が、たかい空に小さく小さくつばさを光らせ、白い飛行機雲をひきながらとんでいるのが見えました。

私のむねに不安がつつてきました。もしあの飛行機が急降下でもしてきたら…。

数分してその機も見えなくなり、ほっと安堵のむねをなでおろしました。

思うように勉強もできず、不安の毎日をすごしながら、一学期が終わりました。

そして夏休みに入り、八月十五日の終戦の日をむかえることになりました。

中溝 政江（旧姓吉川）先生の話

4 鶴川小学校とよばれたころ

(お父さん、お母さんの子どものころ)

〈一時間もかけて歩いて登校〉

鶴川地区に小学校は、一校しかなく、校舎は、今の鶴川中学校の所になりました。鶴川地域全員の子どもが、歩いて学校にかよっていました。三輪(四・五・六年)、小野路(五・六年)の奥の方に住んでいた人は、一時間もかけて通学していました。



今のように、物が豊かでなく、くつ下をはいていた子は、冬でもクラスで二三人。くつは、黒い「だるまぐつ」をみんながはいていました。

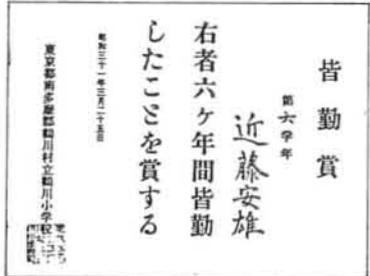
冬になっても、ストーブはなく「ひばち」を使っていたので、あまりあたたまりませんでした。

しかし、みんなは、寒さに負けないで、元気に学校に通っていました。学校では、六年間、欠席しなかった子どもに「皆勤賞」を

げていました。

皆勤賞

第六学年
近藤安雄
右者六ヶ年間皆勤
したことを賞する



粉薬を頭にかけてもらったり、虫くだしを全員がのんだりしました。

トイレは、水洗ではなく「くみとり」でした。ほとんどの家も「くみとり」で、トイレにたまったものは、畑に肥料としてまいていたのです。

〈農はん作業があった〉

その頃は、農業をやっている家が多く、田植え、稲刈りなど一番忙しい時、四年生以上の子は、農繁休業がありました。今みたいに機械はあまりなく、ほとんど人間の手で仕事をしていました。だから、人手が多くなければならず、となり近所の人たちで協力しあって仕事をしていました。四年以上になるともう手伝いも十分できるので、学校に行かず家の仕事の手伝い

をしていたのです。

運動会―部落対抗リレー

運動会の時期になると、校庭の草むしりから、その準備がはじまります。運動会で一番もりあがったのは「部落対抗リレー」でした。六年生が中心になり「部落」ごとに選手を決め、練習をして、運動会にのぞむのです。選手になった人も必死ですが、応援合戦ももりあがり、部落ごとの一体感が発揮されるのです。体育館(講堂)はなく、学芸会は、教室のしきり戸をはずして会場をつくっていました。展覧会は、教室やろう下に掲示して行なったのです。

教室やろう下のゆかは板ばりでした。ぬかそうきんで競争してみがいていたので、とてもきれいでした。



学芸会



てんらん会



どんど焼き



どんど焼きの中に入れる石

〈どんど焼き〉

今も残っている「どんど焼き」そのころは、中学生を中心に近所の家から、おかざりなどを集め、竹や木を山から切ってきて組み立てていました。

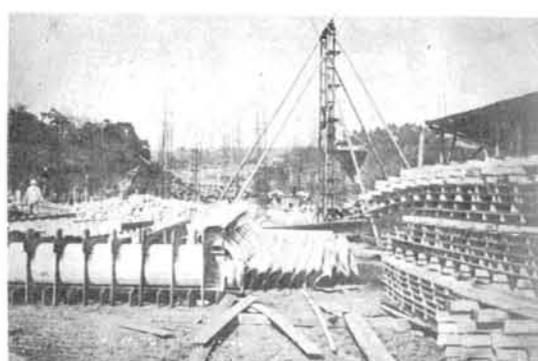
大人はぜんぜん手を出さず、ぜんぶ子どもたちでやっていたのです。谷戸(地区)ごとにきょうそうしあって大きいものを作っていました。他の谷戸(地区)の人にこわされないように夜も見はりなたてるなどしていました。

〈校歌、校章できる〉

今、わたしたちが歌っている校歌と体育着についている校章は、この鶴川小学校のころできました。



この土地に学校ができたのは、昭和四十一年の五月のことです。それまでは、いまの鶴川中学校のある所になっていました。中学生の人数がふえ新しく中学校をつくることになりました。そこで、鶴川第一小学校を別の所にて、そのあと地に中学校をたてることにしたのです。上の写真は、昭和三十九年のものです。この田んぼの付近に学校がたちました。農家の人たちは、長い間耕作してきた土地を手ばなすことはつらかったそうです。でも、自分たちの学校をたてるということで市へ協力しました。そのころはカエルの鳴き声にもぎやかに、そばの小野路川では、ぎばちという魚がいっぱいとれたそうです。



今、鶴川第一小学校は、学区の一番東にあります。この本の十ページの学区のうっぴりかわりの地図でみるとどうでしょう。昭和四十一年ころは、現在の場所が学区のまん中だったので、藤の台小、金井小、大蔵小と別れていたのでどんだん東の方が他の学区域になったのです。昭和四十年から工事が始まりました。田んぼの水はぬかれ、たくさん土が運ばれ、土地は平にされました。何十台ものトラックが鉄こつや窓わく、ガラスを積んで来ました。少しずつできあがっていく校舎を見ながら、鶴川第一小学校へ通学していた人たちは、家から学校が近くなるので完成するのを楽しみにしていたそうです。

5 鶴川第一小学校とって

〈校舎建設工事はじまる〉

この土地に学校ができたのは、昭和四十一年の五月のことです。それまでは、いまの鶴川中学校のある所になっていました。中学生の人数がふえ新しく中学校をつくることになりました。そこで、鶴川第一小学校を別の所にて、そのあと地に中学校

学 習 の 評 価

学 科	学 期 評 価	第 1 學 期		第 2 學 期	
		+2+1	0-1-2	+2+1	0-1-2
国 語	聞く	よく聞き、よくわかる	⊕	⊕	⊕
	話す	必要のことを正しく話せる	⊕	⊕	⊕
	読む	よく読んで、内容がわかる	⊕	⊕	⊕
	書く	文字が正しく、美しく、早くかける	⊕	⊕	⊕
社 会	理解	扱ったことがらよくわかる	⊕	⊕	⊕
	態度	正しい考え方、行い方をする	⊕	⊕	⊕
	技能	作業や、発表の力がある	⊕	⊕	⊕
算 数	理解	算数の知識が正確である	⊕	⊕	⊕
	態度	算数的に考えたり、行ったりする	⊕	⊕	⊕
	技能	計算、問題、図表などよくこなせる	⊕	⊕	⊕
理 科	理解	科学の知識を正しくもっている	⊕	⊕	⊕
	態度	真理をたつとびこれを追い求める	⊕	⊕	⊕
	能力	物事を科学的に見、考え、扱う力	⊕	⊕	⊕
音 楽	鑑賞	音楽を味わい、楽しみ、よくわかる	⊕	⊕	⊕
	表現	曲を正しく歌い作り楽器が使える	⊕	⊕	⊕
	理解	音楽で習った知識がよくわかる	⊕	⊕	⊕
図 画 工 作	鑑賞	作品のねうちを味わう力がある	⊕	⊕	⊕
	表現	描いたり、作ったりする力がある	⊕	⊕	⊕
	理解	色や形や用具、製法などわかる	⊕	⊕	⊕
家 庭	理解	扱ったことがらよくわかる	⊕	⊕	⊕
	態度	習った事が生活に生かされている	⊕	⊕	⊕
	技能	製作したり、應用する力がある	⊕	⊕	⊕
体 育	理解	身体・衛生・運動などの知識がある	⊕	⊕	⊕
	態度	体について正しく考えたり行える	⊕	⊕	⊕
	技能	能力があり、技が身につけている	⊕	⊕	⊕
自 由 研 究	習慣	健康上よいしつけが身につけている	⊕	⊕	⊕
	自由研究	特にやっている研究			

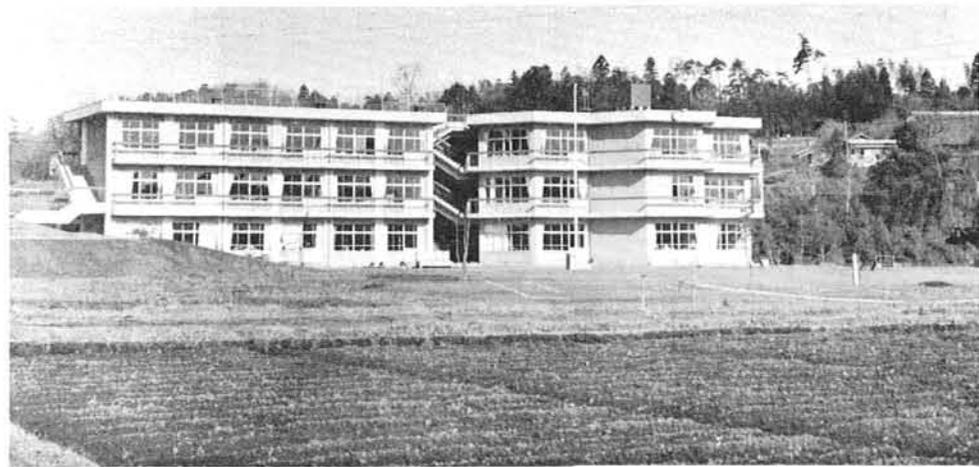
行 動 評 価

項 目	学 期 評 価	第 1 學 期	
		+2+1	0-1-2
1 人・親しみ人から親しまれる	⊕	⊕	⊕
2 人のねうちをみとめてうやまう	⊕	⊕	⊕
3 人の立場や役目をうけいれる	⊕	⊕	⊕
4 人と力をあわせ互に助けあう	⊕	⊕	⊕
5 物事を熱心にする	⊕	⊕	⊕
6 自分のなすべきことをしつかりやる	⊕	⊕	⊕
7 ものごとをねばり強くやりぬく	⊕	⊕	⊕
8 ものごとをやるのにもくろみを立て仕方を考える	⊕	⊕	⊕
9 わがまみをおさえ悪いさいにのらない	⊕	⊕	⊕
10 自分で考へ自分で事のよしあしをきめる	⊕	⊕	⊕
11 悪をにくみ正しい事に組みする	⊕	⊕	⊕
12 事のよしあしを正しく見きわめられる	⊕	⊕	⊕
13 いぢけたり、そわそわしたりしない	⊕	⊕	⊕
14 人々をよくまとめ、ひつげつて行ける	⊕	⊕	⊕
15 常に明るくはがらかである	⊕	⊕	⊕
16 禮儀が正しい	⊕	⊕	⊕
17 きまりをよくのみこんで守る	⊕	⊕	⊕
18 ものごとをどこまでもしらべきめる	⊕	⊕	⊕
19 美しい物事を好みこれをあじあい、あらわす	⊕	⊕	⊕
20 身体や衣服を清けつにたもつ	⊕	⊕	⊕
21 働くことを喜び進んで作業にあたる	⊕	⊕	⊕
22 金や物や時を大事に有効につかう	⊕	⊕	⊕

所 見

担 任 及 び
保 護 者 印

担 任 保 護 者



当時の校舎と運動場



校庭の整地をする児童たち



へひっこしをしたころの思い出――
 六角校舎と、中央校舎、田んぼを整地して作られた運動場、それがひっこし当時の鶴川第一小学校でした。運動場と道路を隔てているフェンスは、その当時もありましたが、道路ぞいの家は、今のようにはなく、ただ田んぼが広がるばかりでした。その田んぼの中で、よく遊んだ思い出があります。バスの時間を待つために遊んだこともよくありました。ただ運動場は、田んぼを整地して作られたものだったので、雨の日は、ドロドロにぬかるみとなってとても困りました。
 校舎は、鉄筋になり、これまでの木造のものとは違ってとてもきれいになりうれしく思いました。トイレも水洗となりきれいで使いやすくなりました。
 六角校舎は、せまい土地のわりにはたくさん教室がつくれる上、かかるお金も少なくてすむということで作られました。自分たちが、鶴川第一小学校にひっこしてきた時は、六年生でした。工事のあとにはごみが多く、ごみひろいや、そのほか運動場の整地などのさまざまな作業をやりました。
 卒業記念には、今の飼育小屋の前にあるキリンを作りました。その当時、そのキリンはとても大きくみえたものでした。今、学校に行ってみたキリンはなんと小さくみえたのが印象的でした。また、少しこわれかけてしまったキリンを見て、残念な気持ちになりました。



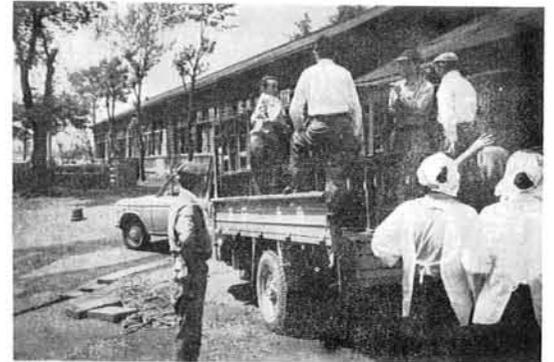
全員で中庭に机いすをならべました



植木のうえかえ



ひっこしの日



地域の人が自分の車を出して運んでくれました

五月 三日(火)	植木のうえかえ
五月 四日(水)	春の運動会
五月 八日(日)	ひっこし準備 (大蔵地区の人)
五月 九日(月)	新校舎けんさ
五月 十一日(水)	ひっこし作業 (金井地区の人)
五月 十二日(木)	小野路分校をなくす
五月 十四日(土)	ひっこし作業一日目 野津田・小野路地区 机、いすを車で運ぶ
五月 十五日(日)	ひっこし作業二日目 小野路、金井地区 たな類運び、そうじ
五月 十六日(月)	田校舎お別れ式 新校舎入居式 校内見学
七月 一日(金)	落成式、五・六年生 参加する

〈新しい校舎へひっこし〉

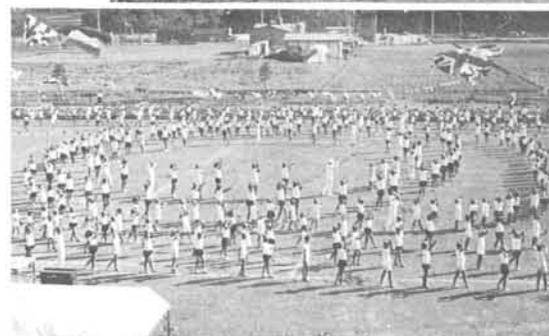
この学校の日誌でそのころのようすをしようかいしよう。はじめに、二百本以上の植木が運ばれました。前日は雨でこの日は朝から大風がふいて道も校庭もどろどろで大変苦ろうしました。五月十一日までに荷づくり作業も終わり十四・十五日でひっこしました。十二日に小野路の分校も本校といっしょになるため、はいしされました。分校の荷物も十五日に本校に運ばれました。十六日、分校にお別れの会をし本校まで歩いて入校式に参加しました。
 荷づくりから運ばんまで地域の人々が力を合わせて協力してくれました。

〈プールも、体育館もない〉

運動会でのかけっこ

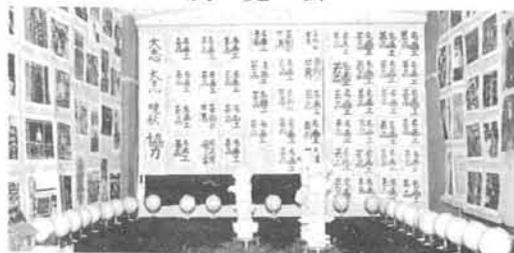


運動会での組み体操



運動会でのおどり

展覧会



卒業式



〈当時の思い出2〉

ひっこし当初の学校には、体育館もプールもありませんでした。今の体育館のあるあたりは遊具もなく、原っぱだけが広がっていました。今のプールのところは、地球儀、はしごだん、シーソーなどの遊具がありました。今の東校舎のころは、花だんやしいく小屋になっていました。

プールがなかったため、水泳は鶴川第二小学校まで、泳ぎに行きました。また市民プールにも泳ぎに行きました。プールが学校にないためか、水泳の回数は少ない気がしました。そのためか泳力は、他校と比べると、少し劣っていた気がしました。

体育館もありませんでしたから、学校行事は各教室を利用してやりました。

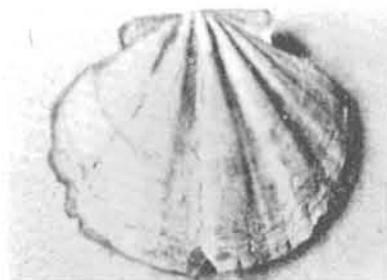
例えば、展覧会は、廊下や図工室を利用してやりました。卒業式は、音楽室を使い、父兄は、ベランダからみるといふ、くふうをしていました。

二 鶴川地区のうつりかわり

1 大むかしの鶴川

鶴川の土地は、今から約四万年前ごろにでき、海の底がもり上がってできたといわれています。ですから、三輪や鶴見川の両岸からも海に住んでいた二枚貝が見つつけられています。

大むかし、鶴川に人びとが住みはじめたころは、谷川にそった丘の上に住んで、けものや魚や貝や木の実を取ってくらしていました。また、そのころ使われていた石器や土器が鶴川のあちらこちらから見つけられています。



鶴見川のほとりから発くつした二枚貝の化石

大蔵の関山、小野路の爪生、広袴などの小高い丘陵の畑から土器が見つつけられています。もちろん丘陵は多摩丘陵のことです。ですから、このころの人びとは、当たりのよい、しめりけの少ない高台に住み、すぐ近くの谷川のわき水を使ってくらしていたことがわかります。水は、人間が生活していくためにどうしてもなくてはならないものです。井戸をほること



鶴川村から発くつされた土器



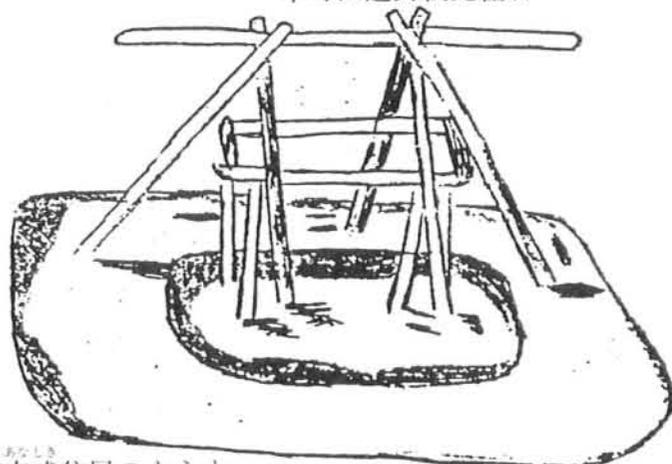
米づくりのころの弥生式土器

を知らなかったこのころの人々にとっては、飲み水を手がかるにえる場所に、住きよをつくらねばならない苦労があったのです。いっぽう食物は、まだ農業を知らなかった人びとには、山の芋、海の幸が大切な食べ物だったので。野津田の綾部、小野路の栗ヶ沢の畑の中からは、矢じり石やなわ目のもようをついた縄文土器も見つけられています。



本町田遺跡復元住居

小野路の五反田橋の近くのがけの上からは、そのころの住居あとのしき石が見つかりました。それは、地面にあなをほって、草で屋根をふき家の中に石をしいたものでした。



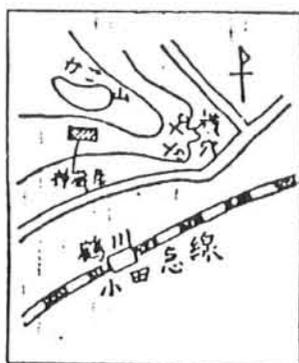
堅穴式住居のようす

〈大きな墓がつくられたころ〉

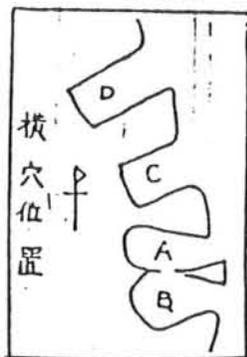
今からおよそ二千年ほど前になると、いねを作りはじめるようになりました。すると人々は、台地から下って谷にそった日当たりのよい所にうつつて住むようになりました。村づくりがすすめられ、このころは、縄文式土器よりずっと美しくうす手な弥生式土器がつかわれ、田んぼからは、弥生式土器のかけらがたくさん見つけられています。

米づくりが進み村もだんだん大きくなると、指導者があらわれ、土地や人びとを支配するようになりました。そして、支配者たちは、大きな古ふんを作って強い力をしめました。

このころの昔をつたえてくれるものに、能ヶ谷の横穴古ふんがあります。ここには横穴が四つあって、そこからは、鉄の刀が十数本、鉄の矢じり、土器、くびかざりなどがでてきたそうです。そして、発くつされたのは「昭和三年四月二十四日」土砂がくずれて発見されたのです。



かご山



四つの横穴古ふん

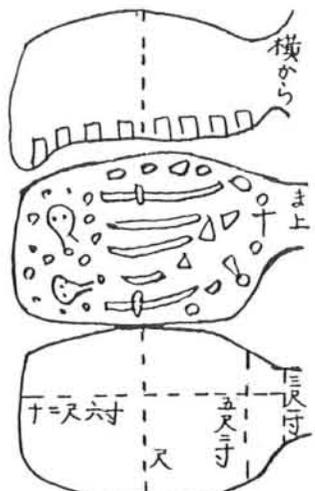
AとBの古ふんから六尺(約一八〇センチ)の男の人体。それから、CとEからは五尺五寸の女の人体。CとBの古ふんの中からは、ほぼ完全に人体がのこっていたそうです。

能ヶ谷の神蔵重弘さんの家(香具山記念館)には、今でもそのころの副そう品がたくさんあります。当時は、日ごろ大切にしていたものを墓の中に入れるならわしがあったのです。

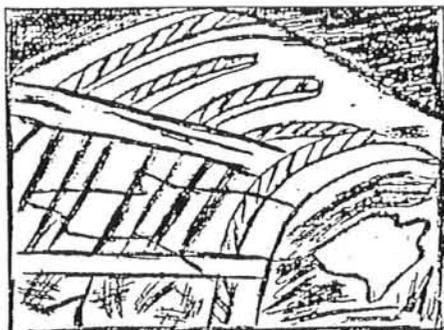


能ヶ谷古ふん出土品

とくに鏡、剣、矢、たてなどは、ふしぎなまよけの力があるということでした。人体のそばに入れたそうです。また、これらのものは、縄文、弥生時代代の物とくらべて進歩し、大陸からの技じゅつを身につけた人びとが日本に入ってくるようになってつくられたものです。



横穴のようす



横穴の天じょうのもよう



三輪の横穴

また、三輪にも古ふんが見つかりました。やはり横穴古ふんで、三輪に住んでいた高橋光蔵さんの手によって発くつされました。今は、あなの口は土でうまり、なかに入ることには困難です。あなは三つあり、奥の天じょうには屋根のようがきざまれ、めずらしい古ふんとされています。これらの古ふんは、とくべつのけん力を持ち、ますます富をふやしていった支配者たちの墓なのです。自分たちが支配した領土を見おろし、支配者としての力をほこっていたのでしよう。

2 鎌倉街道のできたころ

(鎌倉時代・室町時代)

〈古い村小野路〉

奈良時代・平安時代には、わたしたちの住む関東地方は、都から遠くはなれていたの一面に草でおおわれた野原がひろがっていました。鶴見川の下流・中流はだんだん開き、水田がふえていきました。谷戸にも人々が住みつき、畑をたがやしたり水田をつくったりしていました。

小野路は、この頃、国分寺の建てられた武蔵の国(府中)と相模の国(海老名)を結ぶ大事な道の途中にありました。鶴見川にそって通ってきた道が大蔵のあたりで山道に入り小野路を通ったのです。この頃にはもう村ができていました。そのころの家は四方を板やかやで、かこった小さな四角形の家で、かまどもあったようです。また村のまん中あたりにはお米を入れる倉も作られていたと思われまます。

〈小野路の城山〉

京都に住む貴族の力がおとろえてくると、武蔵の国もみだれてきました。そこで自分の土地を守るために、あちこちに武士が生まれ、集団ができてきました。

〈鎌倉街道〉

貴族にかわってはじめに政治をしたのは平氏でした。やがて源氏が平氏をほろぼすと、源頼朝は京都ではなく、鎌倉に幕府をひらきました。この時、関東地方に住んでいた武士の多くは頼朝のけらいになりました。重義の兄弟だった小山田重成・重朝も頼朝に仕えるようになりました。二人とも弓矢が上手で頼朝に目をかけてもらっていたようです。

鎌倉幕府に仕えた家来を御家人といいますが、御家人はふだんは、幕府から与えられた自分の領地に生活していますが、幕府に何かおこった時は、『いざ鎌倉』といって、すぐ鎌倉にかけつけたのです。

鎌倉と関東地方をつなぐ何本もの道ができましたが、その中の一本は、本町田をぬけ小野路を通って府中から上州(群馬)信州(長野)の方までのびていました。

(次のページの地図を見てください。)

今井谷戸から、七国山にのぼり、峠道を下って丸山橋あたりで鶴見川を渡り、野津田車庫のわきに出ます。ここで芝溝街道をわたり、華厳院のわきを通って北へすすみ丘にのぼって神学校をみてしばらく歩くと小野神社の前にでます。小野路の宿を通ってしばらく行くと右に入る小道がありやが



わたくしたちの地区は、小山田氏という武士の土地になり、小山田荘とよばれる広い領地の一部になりました。

小野路には、今でも「城山」とよばれる小高い山があります。ここは小山田氏の一族の小山田重義の城のあとだといいますが、地形に少し手を加えたあとがあります。

小山田氏は、別当という役人として、小山田に来て住みつきしだいに力をつけて大きな領地をもつようになりました。岩子山の観音堂も重義が建てたと言われています。



七国山に残る鎌倉みちと井戸

て多摩市へとつながっています。

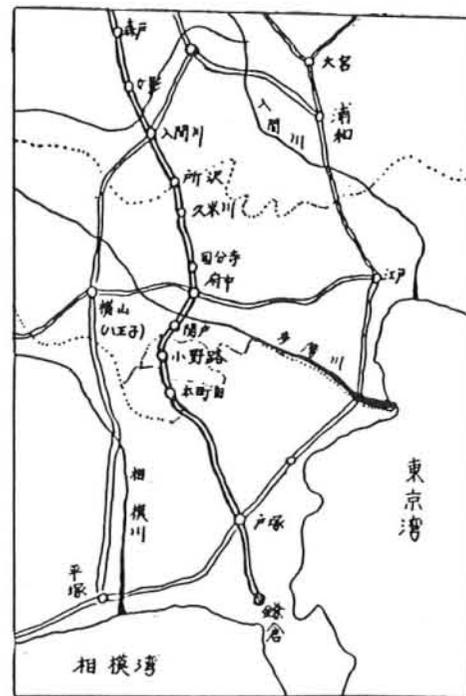
残念ながらニュータウンの工事でのこの先の道はなくなってしまうましたが、七国山には前のページの写真のように古い道が残っていて鎌倉井戸とよばれる湧水のあともあります。

重成や重朝もよろいを身につけ馬に乗って何回もこの道を通っていったことでしょう。

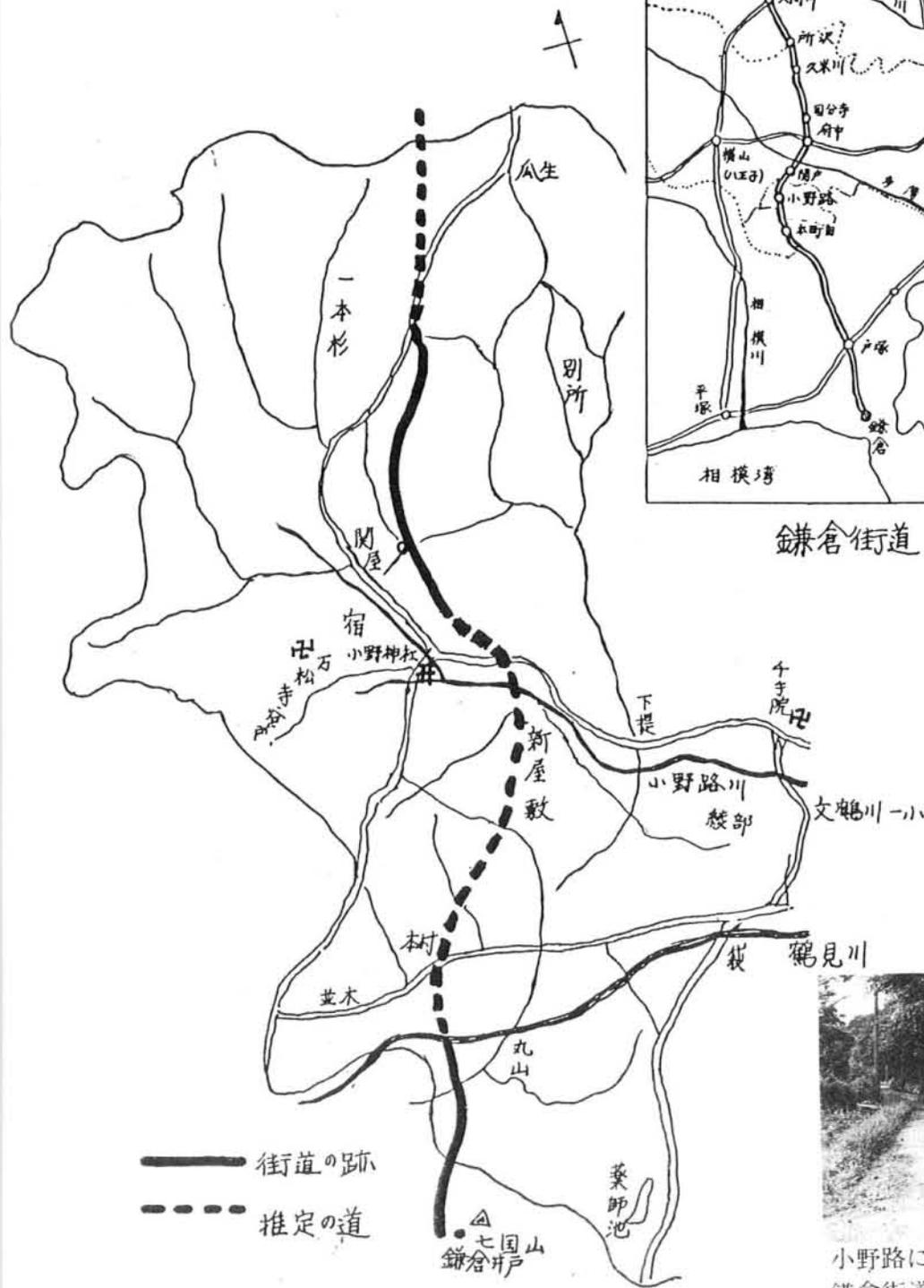
小野路は宿駅といって、ここを通る人たちが泊ったり荷をはこぶための馬をつないでおいたりしたようです。関屋という地名が残っていますが、ここは旅人や村々の人々たちを見守る関所のようなところだったのでしょうか。

その頃の小野路や野津田は、鎌倉に行き来する武士が通ったり、たくさんの荷物をのせた馬をひいた人々が通りかかり、とてもにぎわっていたのです。





鎌倉街道



学区のあたりの鎌倉街道



小野路にのこる鎌倉街道

〈持ちさられた鐘〉

小野神社には、室町時代の終わり頃、高さが一メートルたらずで少し小さいけれど、とても音色のいい鐘がありました。この鐘は、街道を通る人たちが安全な旅ができるように、また村の人々に時を知らせる役目をしてくれるようにと念じてつくられました。(鐘に文がぎざまれています)

ところが、今その鐘は小野神社ではなく、鎌倉の近くの逗子市にある海宝院というお寺にあります。小野神社にあった鐘がなぜ逗子まで運ばれたのでしょうか。

本当のことはまだわかりませんが、一つの説では、鎌倉に攻めよせる軍勢がここを通り、音色がいいので、戦いの合図に鳴らすために持っていったといわれています。

いずれにしても、この鐘は鎌倉街道を通って人から人の手にわたり今のお寺にいたのでしよう。今は、海宝院で大切にされています。

この鐘の話でもわかるとおり、幕府の力が弱まるにつれて、鎌倉街道は戦いのための道になってしまいました。鎌倉へ攻める軍勢、反対に鎌倉から追いかけてくる軍勢が何度も通り、時には戦いの場にもなりました。

新田義貞が兵をあげ十万人もの大軍がここを通りました。本町田の井手の沢では、北条行時と足利直義が「井手の沢の合戦」とよばれるはげしい戦いをしています。

そのたびに

小野路の宿や街道ぞいの野津田の村々は軍勢の宿として使われたり、戦いのために火をつけられてやかれたりしています。田や畑も踏み荒らされて村人もにげまどったことでしょう。

この時代につくられた板碑(板のように石をけずり文字や絵をほったもの)がいくつか残っていますが、死んだ人のくよのために立てられたものや信仰のために立てられたもので、この頃の人びとの不安な気持ちが伝わってきます。

鎌倉幕府がほろびてしまうと小野路の宿も今までのにぎわいはなくなりしましたが、その後も交通の要所として大切な役目は果たしてきました。



小野神社梵鐘(神奈川県逗子市海宝院)

3 にぎやかな小野路の宿



小野路の宿「かどや」

「ごまの油と百姓は、しほればしほるほど、しほれるものなり」とか、「百姓は、死なないでいどに生かしておけ」とか言った、幕府の役人がいたそうですが、農民たちは土地にしばらくつけれ、作ったものの半分以上をさし出すような、きびしい年貢（今の税金のようなもの）をわりあてられていました。そして、五人組というグループがあって、年貢をはらえない人がいたり、悪いことをする人がいたりすると、みんながバツをうけました。ですから、年貢を払えるよう、悪い人が出ないようグループの人たちがみんまで、たすけあったり、注意しあったりしました。けれど、お天気が悪くて作物ができなかつたりすると、年貢ははらえないしこれからの毎日が食べることもできないというような、ひどいことになるので、夏のひでりがつづく、みんないっしょうけんめい雨の神さまにおいのりしたのです。大山の阿夫利神社は雨ふりの神さまですから六月から九月ごろまでは、毎日毎日、とくにたくさんの人たちがおまいりにゆきました。「六根清浄、六根清浄」ととなえながら、おとしよりも若い人も、男も女も、二〇人三〇人のグループをくんで、おまいりをしました。「六根清浄とは目、耳、鼻、舌、体、心をきよめる。」ということなのです。

朝、埼玉を出て、小野路の宿にとまり、また朝早く出かけてつぎは厚木にとまり、大山におまいりします。

〈大山まいり〉



女の人や、足の悪い人などは、馬にのって行きました。ねがいごとがかなうように、おまいりする人はみな、木で作ったかたなをおさめ、おみやげには、木でつくった、うすときねのおもちやをかってかえったそうです。



大山阿夫利神社の札

小野路には、このように旅をする人々をとめる宿やさんが、七けんもあり、たいへんにぎやかでした。宿やはみな、百姓をしながらやっていたそうです。

◎宿やの名前

- ・ だばこ屋
- ・ 中屋
- ・ 魚屋
- ・ 福島屋
- ・ 池田屋
- ・ 河内屋
- ・ 米屋（明治後期より）



〈ききんで苦しむ人々〉



〈ききんの時〉

この時代には、ききんといって、お天気が悪くて作物がほとんどとれず、飢え死する人が出るようなことが何回もありました。その中でも、天保のききんというのは、四年間もお天気の悪い年がつづいて、日本のほとんどがききんになり、食べものがなくたくさんの方が死んだそうです。小野路の村も、このききんで多くのつぶれ百姓ができました。つぶれ百姓というのは、肥料をかったり農具をかったりしたお金が返せなくなって、とうとう田や畑をとりあげられてしまう農民のことをいいます。つぶれ百姓は毎日毎日、その日その日の仕事をもらってやっと生きていくのですが、そんな時には、よく子供たちが、中でも女の子が奉公に出されました。今でいえば、お手伝いさんのようなものです。でも、わがままはせつたい言えないし、自分の家にすきかかってに帰れないし、いくらつらくてもやめることはできません。たとえば、原町田村の十才になる、あるむすめは「家族がおおく、とてもくらしにこまっているので奉公にだすが、どのようなききびしい仕事をやらせてもかまいません」というような証文を入れて、十年間のやくそくで奉公にだされました。そのかわりに、三両（今のお金にすると十万円から十五万円だそうです）のお金を、むすめの親が受けとって、やっと家族が生活していくのです。奉公に出されたむすめたちの仕事は、子もり、井戸の水くみ、つくろいものなどでした。

〈きびしいおふれ〉

幕府は、農民にいろいろときびしいおふれを出しました。

- 。朝は早おきして草をかりなさい。
- 。昼は田畑をたがやしなさい。
- 。夜はナワをなつてタワラを作りなさい。
- 。酒、タバコはのんではいけない。
- 。あそびに行つてはいけない。
- 。麻ともめんものだけを、着なさい。
- 。米を食べずに、だいずやいものはなどをたべなさい。

また、「たとえ、うつくしいおくさんでも、お茶ばかりのんであそびに行つてばかりいるようなら、りこんしなさい」とか、「一月、三月、五月のお節句でもお祭でも法事でも、いっさいお酒をだしてはいけない」とかいうようなおふれも、たくさんでました。しかし農民たちは、たくさんきびしいおふれの中から、ムリなことはすてて、自分たちの生活に、ふさわしいと思うところはとり入れて、たくましく生きてきました。

とくにあそびに出あるくと言われても、おまいりに出かけるのはよいとされていきましたから、村の中でもすこしゆとりのある人たちは、「往來手形」というおふだをもらって、旅にでかけました。「往來手形」には、次のようなことがかいてありました。「この者は、長い間のねがいで、お伊勢参りに行くが旅の中で日がくれたらとめてあげて下さい。もし、病気で死

ぬようなことがあったら、てきとうにほうむつて下さい。」

旅とはいっても、このころは車も電車も飛行機もありません。ひたすらてくてく歩くだけ、たまに舟にのったり馬にのったりするぐらいでした。そのためにつかれがたまって、旅の途中で病気になるって死ぬこともめずらしくありませんでした。野津田村、小川村、小山村、淵野辺村といろいろなところの村人が、一人旅やグループや、女づれなどで、三十日間とか、五十二日間とか長い旅に出た記録がのこっています。



昭和27、8年頃の小野路



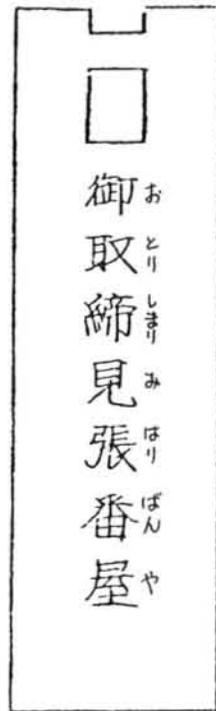
現在の小野路

〈小野路様〉

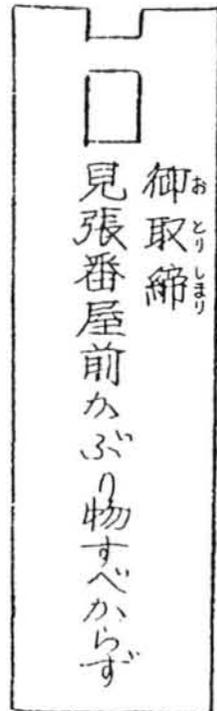
江戸時代の鶴川村は、小野路村、野津田村、大蔵村、金井村、能ヶ谷村、真光寺村、広袴村、三輪村、と八つの村にわかれてました。ところで、その村々をおさめるために名主さんといわれる人がいました。名主さんは、村の中でも、お金もちの人とか、村のためにいっしょうけんめいはたらいた人とか、お父さんやおじいさんが名主さんだった、というような人がなりました。一つの村に一人いるのがふつうでした。小野路村は江戸時代の中心には、名主が二人いましたが、後期には、鶴川周辺

松板

87cm



14cm

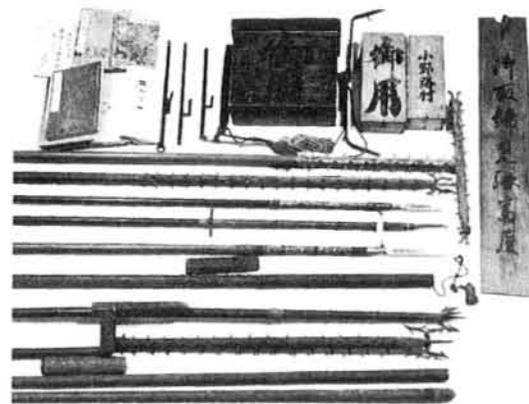


名主さんのお仕事は、

村の人たちが、きちんと年貢をさし出すようにしたり、幕府の命令を伝えたり、平和な暮らしができるように、悪いことをした人をつかまえたりすることでした。名主さんの玄関の入口には、「袖がらみ」「六尺棒」「高張提燈」などがあって、悪人には「小野路さま」とおそれられていたということでした。小野路にはろうやもあつたそうです。



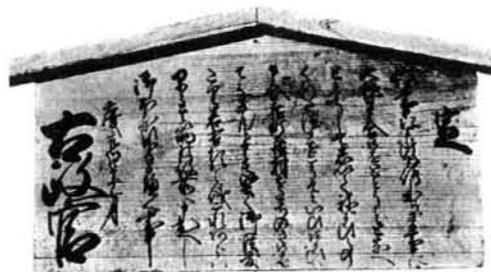
第20代 小島為政



寄場名主時代の取締道具一式

高札の意味

よろしくない事を大勢で相談し集団で願いごとを訴えるとか、住んでいる村をにげ出す事をかたく禁止する。などの意味です。



太政官の高札 (慶応4年3月)



寄場名主の面影をとめていた旧小島邸 (版画)

〈二尊櫃通過〉

今から三百年ほど前の春のはじめごろ、木曾から小野路にかけての農家の人々は、村を通る一本の道をきれいにするためにいそがしくはたらいていました。こわれた橋をかけかえたり、道にかぶさっている木の枝を切りとったり、かたむいた物おきをたてなおしました。みんなが集まって何回も話しあったりしました。それは、この道を徳川家康の遺骨(遺骨を入れた箱を「尊櫃」といふ)を日光へおくるための行列が、三月のすえ頃通ることになったから、手入れをしっかりとっておくようにというおふれがあったからです。徳川家に代々つかえた大名たちがつき従った行列は、三月二十一日に木曾、小野路の宿で、それぞれ休けいしながら町田を通りすぎました。行列の人数は千人にもなったといわれています。ところでこの行列の人たちが、小野路の村に入ろうという時、ご尊櫃をのせた車のじくがおれて、動けなくなってしまうたそうです。行列の人たちはたいへん困りましたが、それを見て村人が、乞田村のかじやさんを大いそぎでよんで車をなおしてあげたそうです。そのことをよるこんで、そのころ村人たちが命ぜられていた「助郷」という道の修理や馬の用意と世話などの仕事をこれからずっとやらなくともよいようにしてくれたそうです。

4 野津田で自由民権運動がさか んになったところ

〈自由民権運動とは〉

一八八一年（明治十四年）前後にさかんでした。国会、憲法政治的自由を求めた政治的な運動です。

明治政府のなかに朝鮮を武力で開国させようとする〈征韓論〉がおこると、一八七三年（明治九年）、板垣退助は西郷隆盛らとともにそれを主張し、国内の政治をよくしていこうとする人たちと対立して参議（今でいう大臣）をやめました。

板垣退助は、翌年一月に、ともにやめた参議らとともに、自由民権（人間の自由と権利をのばすこと）をとる運動をおこし、高知で立志社をつくり、さらに全国へ運動を広げようとなりました。

一八八一年（明治十四年）十月には自由党が結成されて、板垣退助は総理になり、自由主義をかかげ、全国的な政治組織へと広がっていったのです。

〈三多摩自由民権運動〉

三多摩自由民権運動の最高指導者は、石坂昌孝です。武蔵国南多摩郡野津田村（いまの東京都町田市）丸山の石坂清右衛門の家に生まれました。三人兄弟の末っ子でした。高之助（昌孝）

は、七日目にお母さんの育った石坂又二郎家にもらわれていました。又二郎家は野津田一の大農家でした。

〈石坂昌孝と自由民権運動〉

天保十二年（二八四） 武蔵国多摩郡野津田村に生まれる。

明治二年（二八六） 一村名主制により野津田村年寄になる。

明治四年（二八七） 小野郷学の設立。村落教育運動をする。

明治十一年（二七六） 「責せん会」を設立する。

明治十二年（二七九） 神奈川県会議員になる。初代議長となる。

明治十四年（二八二） 「武相こんしん会」を設立する。

「ゆうかん社」を設立する。

自由党に入る。

明治十六年（二八四） 神奈川県自由党の最高指導者となる。

明治二十三年（二九〇） 衆議院議員に当選する。

明治二十九年（二九六） 群馬県知事になる。

明治四十年（三〇七） 東京牛込にて亡くなる。（六十六歳）

大正五年（二九六） 八王子富士森公園に碑が建立される。



石坂昌孝氏

このころ小島為政から多くのことを学びました。

〈小野郷学〉

一八六七年、二百六十年あまり続いた江戸幕府がおされ、

明治時代が始まりました。

明治四年、神奈川県庁より、各地に学校を設立するようになると知らせがありました。石坂昌孝、小島為政、橋本政直らを中心に野津田の華厳院に小野郷学という学校をつくりました。

生徒の人数は、およそ百五十名余りでした。そこで鶴川地区の子どもや青年を集め漢学を中心とした教育をし、農民たちをつなかりを強めていきました。この郷学は二年間続きました。

明治になって八大区、（町田、多摩、稲城、日野の一部）という広い地区の代表となりました。地区のためによく働いたので、神奈川県知事の中島信行さんに認められ、神奈川県役人となりました。この時新しい日本の将来についていろいろ学びました。

〈責善会〉

一八七八年、石坂昌孝を中心として、小野路村の橋本政直や大蔵村の中溝昌弘たちと共に「責善会」という学習会を開き、暮ししやすい村にするために自由に意見を出し合いました。

〈江戸時代のように〉

石坂昌孝の生まれたころは、徳川家を中心となって、国のきまりを作ったり、国民にいろいろな命令を出していました。

この時代野津田に住んでいた人は、ほとんどが農民でした。農民が作った米を武士が年貢（税金）としてたくさん取りためたのでいくら働いても農民の生活はまずいものでした。

農家に生まれた人は、一生農民であり、ほかの仕事につくことはできませんでした。

人間として自由に生きることができない世の中だったので、石坂昌孝の育った石坂家は、大農家で名主という仕事をしていました。広い田や畑を村の農民たちに貸して、米ややさいをうけとり豊かな生活をしていました。

十六歳の時に名主をしていた石坂又二郎が亡くなったので、名主をすることになりました。

名主というのは村の代表として、野津田地区をおさめる富田のどの様の命令を野津田の人々に伝える仕事です。

名主となった石坂昌孝は、村人から重い年貢（税金）を取り立てなくてはなりません。しかし農民の苦しい生活をよく知っていたので、富田のどの様の命令にしたがわないで、農民を救いました。この事で野津田村から追い出され、一年間よその村で勉強させられました。

農民のために自分をぎせいにして行動したのです。

〈自由民権運動に参加〉

神奈川県の県議会の議員に選ばれ議長になりましたが、世の中のこまっっている人々のために役に立ちたいと考え一年間で議員をやめ武相こんしん会という学習会で、自由民権運動について勉強し町田周辺の地区を中心に行動しようと考え、「融貫社」という団体を作り、自由民権運動をすすめていきました。板垣退助は、自由党を作り日本中に運動を広めていこうと考えました。

このことを知った石坂昌孝は「融貫社」の人たちと自由党に入りました。人がらに多くの人が心をうたれ、三多摩地方に住む人々は自由党に入っていました。神奈川県は、(二百八十四名)になりました。自由党に入った人は、生活にゆとりのある大農家でした。石坂昌孝は、神奈川県の自由党の先頭に立って活躍しました。明治十七年の八月に、自由民権運動の最高指導者、板垣退助を八王子にまねき、多くの人をよんで演説会をひらきました。このころ日本の政府は、自由民権運動をおさえようとしていました。

〈町田の農民の生活〉

農民たちは農作物を売ってもほとんど利えきはなかったが、高い税金を国にはらわなければならなかったため、銀行やお金をかす人たちからお金を借りて生活していました。利子が高かったため、借りたお金を返すために田や畑を売ってしまいました。土地を持たない農民が増えていきました。

〈村野常右衛門〉

安政六年七月二十五日、南多摩郡鶴川村(町田市)に生まれました。郷土の先ばい石坂昌孝とともに自由党に入り、県会議員から衆議院議員になり活躍しました。まちがったことは許さず正義感を持って仕事をしました。

小田原急行電鉄が開通するために力をつくしたため、そのお礼としてお金を渡そうとすると『道がちがう』と言って受け取らなかつたそうです。

首相である原敬(政友会という政党の中で、旧さつま、長州出身者だけが政治の中心となる藩閥政治に反対した)に司法大臣になってほしいと強く望まれましたが、断りました。また衆議院議長になってほしいと推せんされた時も辞退しました。

みんなが認める実力はあっても、地位や名譽はあまり望まない人だったので、政友会の中ではかなり勢力がありました。そのため、反対の政党の人々からも尊敬されていました。



村野常右衛門

今、自由民権資料館のたっている所に常右衛門は凌霜館という剣道の道場をつくっていました。昼間は、剣道を教え、夜は、自由民権について若い人々と議論しながら指導していきました。後で活やくする三多摩壮士という人々が育っていきました。

〈自由党解散〉

板垣退助が指導者となり、全国各地ですすめられていた自由民権運動は、これまでとちがいが武器をもって戦うはげしいものとなり、明治政府のとりしまりもきびしくなってきました。このような中で自由党は解散しました。

〈国会議員・群馬県知事のころ〉

明治二十三年七月一日、国会議員を選ぶ選挙が行なわれました。石坂昌孝は、国民の自由や権利を人々にうたえて、国会議員に当選しました。解散した自由党をもう一度作ろうと考え努力し、ふたたび自由党を作り関東地方の代表として活躍しました。

明治政府と対立していた自由党は、日清戦争(中国)の後、明治政府に協力するようになってきました。政府は自由党の中で実力のある人を県知事に任命しました。石坂昌孝は群馬県知事となり七ヶ月間仕事をしました。

石坂昌孝は、明治十年から二十年間自由民権運動に取り組みました。おかげで国会も作られ、不平等な外国との条約も少しずつ良くなってきました。

今は、民主主義の世の中になり自分たちの考えで代表者を国会におくりだし政治にも参加することができます。自分の意見を自由に言うこともできます。多くの人たちの運動の上に私たちの生活が築かれています。

自由民権運動史跡めぐり

○自由民権資料館から→の方向に進んでいくと史跡めぐりができます。



5 戦争と鶴川

〈関東大震災と鶴川村〉

大正十二（一九二三）年九月一日午前十一時五十八分、相模湾を震源地とした大地震が関東地方をおそいました。大きさはマグニチュード七・五で、震度六（烈震）という激しいゆれを感じました。鶴川は東京市街地よりも震源地に近かったため、ゆれかたもひどかったようです。

今の都道三九号線は当時六尺道路でした。これが真光寺からちよど私のところを出た線から広袴は、全部一しゆんのもとにやつぎきになり、かろうじて両はしの残ったところを歩いて通いました。橋はことごとく破壊されました。

（真光寺・小野輝治さんの話）

鶴川村では古い家が多く、半潰の家ではとても住める状態ではありませんでした。他の町村に比べてこわれた家が多かったにもかかわらず大地震による火災が起きなかったのは不思議なくらいでした。九月二日からは東京方面から鶴川街道ぞいに、被災者の列が多く続きました。



〈デマとパニック現象〉

大震災の直後に「富士山が大爆発した」、「大津波がくる」といったうわさが東京にたくさん流れました。そのうち「社会主義者や朝鮮人が放火している」、「朝鮮人がおそってきて、井戸に毒を投げた」などというデマが飛ばされ、人々が大混乱するパニック現象が起こりました。二日には鶴川にもそうしたデマが伝わり、大きなさわぎになりました。

村民には「家にある日本刀・槍など武器となるものはすべて持って出よ」という命令がきましたが、この命令はどこから出たかわかりません。在郷軍人、消防団員、青年団員らは竹槍をめいめいこしらえ、日本刀、猟銃、ピストルをたずさえました。村の年より・子どもは山へ避難させ、それらの人々におむすびを用意し、水はめいめいがバケツをさげ塩気を持たせろ城させました。青年団は夜を徹して警戒に当たりました。二日の夜「原町田方面に朝鮮人の一部隊がきていよいよ決戦に入るから準備を強固にしろ」という伝達がありました。そのうち「拳銃の音も猟銃の音も聞える」、「小野路にきた」というニュースが入ります。

ところが三、四発の銃声が聞こえました。このときはさすがにやっばりきたかと思いましたが、子どもの泣き声によって山に避難していた人々が発見されるのを、極度におそれました。

（真光寺・小野輝治さんのお話）

他の町村に比べて避難した人の数が少ないのは、鶴川村の被害が大きく避難できる状態ではなかったからかもしれません。

大地震は農作物にも

大きな被害をもたらしました。田んぼはあちこちでこぼこになり地われによって水を入れてもたまらず、そのためお米はほとんどとれませんでした。

また、養蚕とともに盛んであった禪寺丸という柿の生産にも大きな被害を与えました。大震災によって柿の根がすっかりいじめられてしまい、全部だめになってしまいました。その後も昭和二十年ころまではほとんど柿がとれなかったというくらいひどかったのです。

町 村 名	家屋全潰				家屋半潰				死者	負傷者
	住家	倉庫	其他	計	住家	倉庫	其他	計		
鶴川村	40	70	218	348	104	182	292	740	2	9
南村	57	16	126	219	100	83	169	371	1	6
町田町	130	40	94	269	264	91	113	426	2	7
忠生村	70	45	190	306	150	196	193	543	5	4
堺村	52	21	164	237	90	93	103	290	6	11
計	349	192	792	1,379	708	645	870	2,370	16	37
南多摩郡 計	482	252	1,173	1,957	926	1,361	1,306	3,816	28	47

家や人のひがいのようす

	南多摩	鶴川村	南村	町田町	忠生村	堺村	小計
人数	2,496	134	382	399	234	142	1,291

当時この地域にひなんした人数

〈小田急線の開通〉

昭和二年（一九二七）四月一日、新宿〜小田原間が開業しました。試乗車は、二時間二十三分で走る予定でしたが、ミスが重なり、何と八時間もかかるという大変なスタートの日になりました。開業の時は、稲田登戸〜座間間は単線運転で、市内の駅は新原町田と鶴川だけで、まだ、玉川学園前駅はありませんでした。最初の計画では、今の線よりも南の神奈川県内を通るはずでしたが、利光鶴松社長と親しかった村野常右衛門の意見によって、岡上と鶴川の境を鶴見川越えに変更したようです。また、鶴川〜玉川学園前間の間に二・三〇メートルの境塚トンネルは難工事で、当時のお金で三一万二九〇四円も使いやつと完成したそうです。

小田急線の開通によって、町田や鶴川の人々の生活は大きく変わりました。それまで鶴川から都会へ出るとすれば、歩いて原町田へ行き、横浜線で横浜や八王子に行くより方法はありませんでした。まして東京まで出るとすれば、東海道線や中央線を使って遠回りをして行くほかはなかったのです。それが新宿まで一時間以内で行けることになったのですから、一気に便利になったわけです。当時の所要時間と旅客運賃は次の通りです。

新宿〜新原町田	五十四分	五十八銭
新宿〜玉川学園前	四十五分	五十三銭
新宿〜鶴川	四十二分	四十八銭

一日に二十四本、四十五分ごとに運転されています。

〈当時・そかい児童だった人のお話〉

私は当時品川区立鈴ヶ森国民学校の三年生でした。品川区の家のまわりは爆弾で焼かれ、毎日のように空襲警報が鳴り、防空壕に逃げる生活をしていました。それをのがれるために昭和十九年八月十五日、鶴川村の万松寺へ二十七人の仲間と来ました。着いた時はのどかな所だったのでホッとしました。

五・六年生は鶴川国民学校へ、三・四年生は小野路分校へ、わらじをはいて防空頭巾をかぶって通学しました。一番つらかったことは食べ物がなくおなかがついていたことです。食事と言えば、うすい塩味の大根のぞうすいだけの時が多かったです。それもほとんどが大根ばかりで、米つぶはほんの少しでしたので、おなかにはたまりませんでした。大根と言っても今の大根とは違って苦くておいしくありませんでした。

たまに面会でもらうお菓子がとてもおいしかったことを覚えています。面会にだれも来ない子もいました。ですから山でドングリやカヤの実を拾ったり、川でザリガニやタニシを捕ったり、カエルやイナゴを食べたりしました。道ばたのスイバ・ノビルなどの野草も食べました。

とてもこわかったことは空襲でした。昭和二十年五月二十六日の夜、急に焼夷弾が落とされ、お寺が火の海になりあわてて逃げ出しました。あわてていたので山道ではだしの足に粟のとげをさし血が出ました。ふとんも本も荷物もみな燃えてしま

ました。六年生や先生方がほうきやぼうで火を消していました。今思い出すと六年生は勇敢だったと思います。二度とあのような経験はしたくありません。(長野さかえさんより)

〈当時、寮母さんだった人のお話〉

食べ物がなく苦労しました。先生が放課後、農家に買い出しに行っていました。農家でも、男の人は戦争に行つて働き手が少なく、売るほど物がありませんでした。そのため、栄養不足で病氣やけがが、なかなか治らなかつたです。薬もありませんでした。

またシラミが多く髪をくしでとくとシラミでくしが白くなりました。頭には、水銀なんこうをぬって殺していましたが、卵には効かないのですぐに発生し、子ども達がとてもかゆがってかわいそうでした。

お風呂は、まきがあまりなかつたので、週一度位で、あとは

〈当時の学寮さんのお話〉

昭和二十年五月二十六日、鈴ヶ森国民学校万松寺学寮は、東京へ空襲に向かうB29二機編隊のために百数十発の焼夷弾の直撃を受けました。庫裡は、直撃弾の十数発を大黒柱と疎開荷物の真ん中に受け、火柱をあげて燃えましました。子ども達は燃え上がる悪魔のような火に取り囲まれていました。前庭とまわりの植木ばかりでなく、田畑、竹やぶ、山林などすべてが油煙に包まれ、1m以上も火の海となって燃えていました。とつさに、

相馬先生(元安全寺学寮長・二十才)と高橋先生(二十才)は子ども達の避難を開始しました。どのようにしてその火の海を通り抜けるかを考えた二人の先生は、座敷ぼうきで油煙をたたきはじめました。子ども達は泣き叫びます。このとき大声で「鬼畜の米機何するものぞ、進め！」ととなり、阿修羅のようにほうきを振り上げ進んだこの女の先生の姿は忘れられません。この時の小野路空襲では、万松寺を含めて十軒が全焼し、二軒が一部焼失しましたが、幸いにも死傷者は出ませんでした。

子ども達も、はだしてねまきのまま、全員無事に約3km東方の岩子山千手院へ避難することができました。のち小野路下宿の細野寿さんの別宅へ移り、そこで敗戦の日を迎えました。

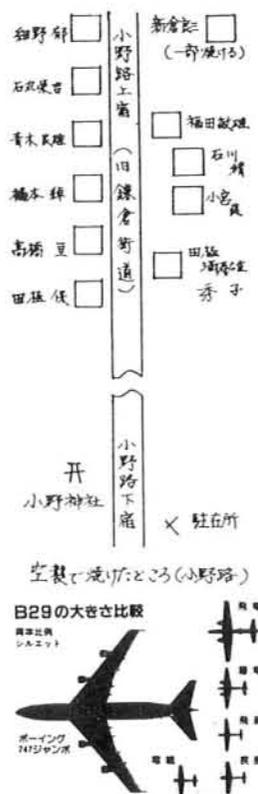
今でも万松寺の土蔵の穴や焼けただれた柿の木はそのままの姿で残り、戦争のこわさを私たちに伝えてくれているのです。

(工藤さんより)

学童集団疎開の1日

- 起床、洗面、冷水まさつ
- 朝礼 (宮城遙拝、先生のお話)
- 体操、散歩
- 朝食、休憩 (1時間)
- 「座学」(学習のこと、2時間)
- 自由時間 (1時間)
- 昼食、休憩 (1時間)
- 水泳訓練 (猛苗代湖)
- おやつ、自由時間
- 入浴 (午後4時半ごろ)
- 夕食
- 精神訓練 (7時半ごろ)
- 就寝準備 (8時半)
- 消燈 (8時45分)

加瀬勇、1944年9月7日(福島県) 付書簡(両親宛)より



(福留さんより)

空襲で焼けたところ(小野路)



6 村から市へ

緑ゆたかな小野路、野津田の古い道を歩くと通りに面して、おじぞう様や馬頭観音様がひっそりと建っているようすをみなさんも、きつと見たことがあるでしょう。

よくよく見ると何やら書いてあります。それを建てた人の名前、場所などが書かれています。

年 うつりかわり
明一 神奈川県となる。

(八つの村)

明二一 八つの村が合へ
いし鶴川村が生
まれる。

明二六 鶴川村は神奈川
県をはなれ東京
府に入る。

昭三三 鶴川村は、町田
町、忠生村、堺
村と合へいし、
町田市をつくる。

その中に、小野路村、野津田村や鶴川村などの文字を見つける時があるでしょう。

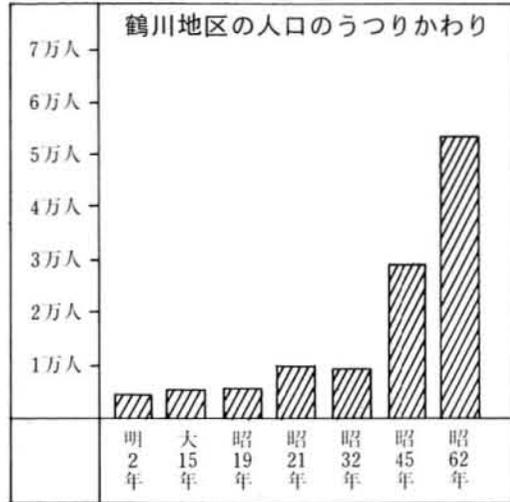
明治二十二年、小野路村、野津田村、大蔵村、真光寺村、三輪村、金井村、広袴村、能ヶ谷村が合へいし、鶴見川の名をとり鶴川村が生まれました。

平和な村のくらしの中にもいくつかの戦争をのりこえ、昭和三十三年約七十年にわたる村の歴史を終え鶴川村は、他の村や町と合へいし新しく町田市として生まれかわったのです。

〈ふえてきた人口〉

今からおおよそ百二十年前(明治二年)、鶴川地区の人口は、三千五百人ほどでした。昭和十九年ごろまで五千八百人だった人口は、終戦と同時に急にふえました。どうしてでしょう。

日本が戦争に負け始め、都心部がアメリカ軍によりこうげきされるようになり、都市に住む人々は、安全な地いきに移り住むようになりました。この鶴川地区にもたくさんの方がひっこしてきたのです。また、終戦と同時に兵隊に行っていた人たちが帰って来ました。都心部に働きに行っていた人たちも工場や



会社や焼けてなくなつたので、鶴川地区に帰ってきたのです。その上、おそろしいほどの食りよう不足で農業の仕事にもどる人がふえたからです。ところが、その後、しばらく、人口はへり続けます。世の中が落ちつき、工業や商業などが発たつし、鶴川地区をはなれ、都心の方へ

〈終戦まもないころの人々のくらし〉

袋に住んでいるおばあさんの話

(吉澤ヨネさんのお話)



買出しのようす

太平洋戦争から物は不足していましたが戦争が終つてからはさらに物が手に入らなくなりました。私の家は農家でしたが、作った農作物は国の方へ出さなければならず自分の家で食べるのにも不自由しました。

都心の方から大きなふくろをしょってよくこの野津田にも食べ物を買いに来る人がいました。お金のかわりに衣類と食べ物とをこうかんしました。

私もよめ入りの時持ってきたきものを使って子どもたちに標準服を作つてきました。また塩やさとうやせっけんもまだ配給で配給キップと代金を持ってリヤカーを引いて能ヶ谷まで行きました。昭和二十年代は、まだまだ苦しい生活でした。



配給キップ

と働きに行ったからです。

工業をはじめとしてわが国の産業が成長してくると、仕事を求めて地方から都会へ人が集まってきました。都心では、年とともに住宅が不足して来ました。都心まで、電車で約四十分というべん利な町田市は、都会で働く人たちの住宅地として注目されるようになりました。そこで、東京都と国は、鶴川地区に

大きな団地をつくることにしました。昭和三十八年から工事を始め、四十三年から住めるようになり、鶴川地区の人口は急にふくれ上がりました。

さて、小野路と野津田町の人口を調べてみましょう。

町名	昭和二六	昭和六二
小野路町	一五八六	二四八四
野津田町	一二四八	五五二四

鶴川村のころは、小野路の方が人口が多かったが現在では、野津田の方が多く、村のころとくらべ約四倍以上もふえています。そのわけについて考えてみましょう。

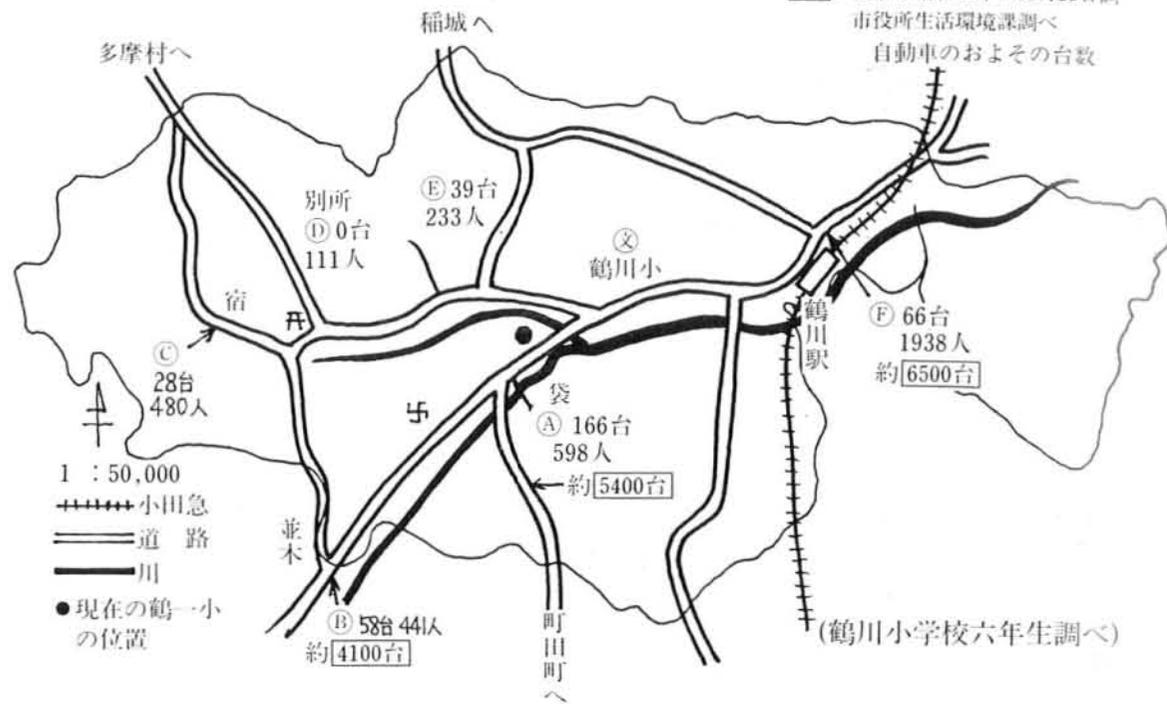


鶴川団地の造成

昭和25年ごろの主な道路と交通量

調査日・昭和25年2月5日(日)
時間・午前7:00から午後5時まで

□の数字は昭和62年の11月25日調査
市役所生活環境課調べ
自動車のおよその台数



年	昭10年	昭25年	昭62年
地区の家の数	883 けん	1411 けん	18,389 けん
農家	793 けん	910 けん	572 けん
わり合	90%	65%	0.03%



めかい

〈農業の村から、商業・工業・住宅のまちへ〉
秋にもなると学校の正門の近くで、折れるほどにたくさん実った柿の実を見ることが出来ます。

鶴川名産「^檪寺丸^丸」です。柿生を中心として広く植えられ鶴川地方の名産とよばれ、農家の現金収入の一つとなりました。柿とならんでよく目にするのが栗です。鶴川村でも特に、小野路に一番多く植えてありました。また、小野路では、しの竹を材料としためかい作りがさかんでした。さて、鶴川村の人たちは、どんな仕事をしていたのでしょう。上の表からわかるようにほとんどの人が農業です。米づくりを中心とし、畑で野さいやくくだ物を育てていました。鶴見川にそった野津田、大蔵、能ヶ谷は水田にめぐまられていましたが、丘の多い小野路は、畑作が中心でした。

鶴川名産「^檪寺丸^丸」です。柿生を中心として広く植えられ鶴川地方の名産とよばれ、農家の現金収入の一つとなりました。柿とならんでよく目にするのが栗です。鶴川村でも特に、小野路に一番多く植えてありました。また、小野路では、しの竹を材料としためかい作りがさかんでした。さて、鶴川村の人たちは、どんな仕事をしていたのでしょう。上の表からわかるようにほとんどの人が農業です。米づくりを中心とし、畑で野さいやくくだ物を育てていました。鶴見川にそった野津田、大蔵、能ヶ谷は水田にめぐまられていましたが、丘の多い小野路は、畑作が中心でした。

〈交通のうつりかわり〉

鶴一小の前の川島入口バス停での発車時刻表を見ると、野津田車庫方面行と町田駅方面行の本数は百八十七本もあります。五分に一台の間かくで通っていることになり、長くバス停で待つこともありません。ところが昭和二十五年ごろはどうだったでしょう。なんと一日に四本ぐらいしかなかったそうです。それも町田駅行ばかりで野津田車庫方面行はなかったそうです。町田町や並木・小野路地区に行くにもみんな歩いていったそうです。乗物と言えは自転車ばかりで、牛が引く荷車がのんびりと往來していました。上の資料は、当時の本校の六年生が調べたものです。道の数、位置が現在とだいぶちがっていますね。これで見ると、鶴川村で一番車が通っていた所は袋橋付近で鶴川駅前より多かったのです。しかも並木方面ではなく町田駅方面に向かって走っていたのです。また、現在、大きな道が通っている別所・中村付近には、車が走っていません。多摩村には、小野路の宿を通過して行っていたのでしょう。人通りは、鶴川駅前が最も多く、次が袋橋付近となっていています。昭和六十三年の交通量とくらべてみましょう。鶴川駅前には六五〇〇台で昭和二十五年の約百倍にもふえています。袋橋付近が三〇倍、並木が七〇倍と自動車の交通量はものすごくふえています。現在工事中の多摩市府中市とを結ぶ道が完成するとさらに学区の交通ははげしくなるでしょう。

	人口(人)	農家(戸)	商店	工場
小野路町	昭26	1586	268	4
	昭63 (昭和62年)	2484	123	42
野津田町	昭26	1248	206	6
	昭63 (昭和62年)	5524	95	52



ひも工場

農家は半分にはなっています。商店の数は約十倍にふえています。また、農家で作る作物も米中心から、ビニールハウスを使った野さいづくりや花、植木など商品として売りやすい物にかわっています。商店では、飲食店の増加が目立ちます。前は、一つの店でたくさん品物を売っていましたが、今は、専門店もふえています。特に変化がはげしいのは工場です。前は、ひも工場と精米工場だけでした。今では、三十七もありいろんな物をつくっています。これからもさまざまな工場がつくられていくことでしょう。

昭和二十六年と昭和六十三年と本校の子どもたちが歩き回って調べあげた「学区の産業」をもとに地域の変化をみてみましょう。

1 古道・旧道



これは、学区の航空写真です。現在の道路のようすが、よくわかります。

問1 学校や、自分の家は、どの辺ですか。わかる地名を入れてみましょう。

問2 昔は、どのあたりを、道が通っていたと思いますか。なぜ、そう思うのですか。

問3 昔の人が、道を歩いていたとします。どんな事を考えて歩いているのでしょうか。又、どんな用があるのでしょうか。

(昔ってどれくらい昔か、それも考えてみましょう。)

昔の道は、曲がりくねった細い道。今の道は、まっすぐな、広い道です。昔の道は、安全で、地形的に、土地の低い所を、飲み水や、休けい場所、宿泊場所をつなぐように通っています。

って、税(米や布)を運びました。

鎌倉古道と小山田氏。天和二年(一六八二年)の地図には、鶴見川のことを、小山田川と書いてあります。小山田氏は、源頼朝の家来でした。争いが起こると、武士達は、鎌倉へかけつけました。

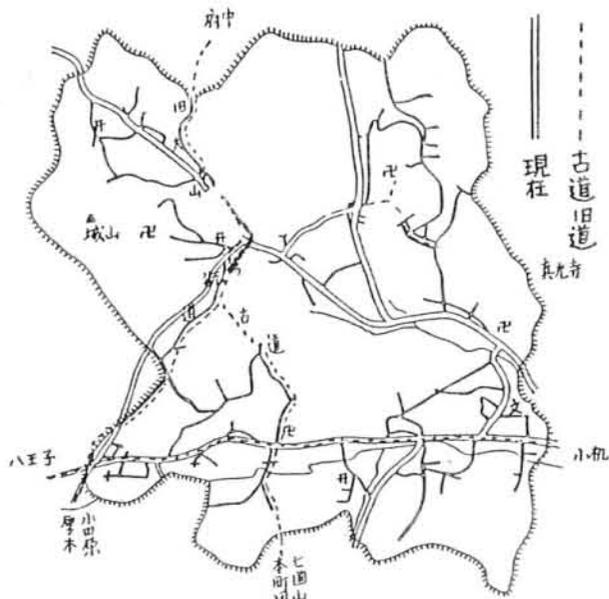
後北条氏と城。小田原城、八王子城、小山田城、小野路城、沢山城、成瀬城、小机城など、小さな城が、いくつも作られました。

お寺も、いざという時大勢の人が入れる、防ぎよ陣地としての働きも持っていました。

これらの、城と城、城と寺を結ぶ道が必要でした。旧大山街道と大山詣り(大山講)。大山の阿夫利神社は雨を降らせる神として、人々の信仰を集めました。農民は、こぞって大山詣りをし、その年の豊作を祈りました。

江戸への道。太田道灌が、江戸城を作り、鎌倉と江戸の間をしばしば往き来しました。江戸城に、徳川家康が入るようになると、江戸への道は、ますますたいせつになりました。

横浜への道。横浜港が開港し、絹が輸出品として、もてはやされるようになると、群馬県や、長野県の絹が、町田を通過して大量に、横浜に運ばれました。やりみず街道は、絹の道とも言われました。



以上のように、各時代によって、道の必要度はちがっても、だんだんと道がふえ、大きくなっていきました。

現在の道と、旧道・古道。

た。川の水でも、飲めないことはありませんが、わき水や、井戸が、とても大切でした。

昔の人が、遠くまで行く用とは、どんな事だったのでしょう。

- 一、経済的理由(食べ物や、道具を得る。仕事。運ばん。)
- 二、政治的理由(手紙や、情報の伝達。いくさ。)
- 三、宗教的理由(神社や、お寺へのおまいり。大山講。)
- 四、その他

時代によって、その道の持つ重要度が、ちがってきます。それでは、もう少し、時代ごとに、どんな道が必要だったかを、考えてみましょう。

町田市内で、石器や、土器、住居址が発掘されます。このことから、縄文、弥生時代以前から、人々が住んでいたと考えられています。(鶴見川谷のあたりは、特に多くの住居址が、見つかっています。その人々が、食べ物を求めて何らかの道を通ったと考えられます。)

田んぼで、米を作るようになると、水が必要になります。そこで野津田の低い土地、鶴見川ぞいが、とてもたいせつな土地になりました。

奈良時代に、各地に、国分寺が出来ました。その国の政治の中心地を、府中と言いました。

武蔵の国(東京都)の府中と、相模の国(神奈川県)の府中(海老名付近)を結ぶ道が必要でした。人々は、その道を通

上の地図は、天和二年の町田市内で一番古いと思われるものです。これによると華嚴院の北の部分が山になっていて、鎌倉古道は、よくわかりませんが、向坂で旧大山街道と、合流していたものと考えられます。

旧大山街道が、一番広く書かれています。八王子、小田原、

小机などの方向が示されています。小山田川(鶴見川)には、橋は、書かれていません。橋が無かったか、書かなかったかのどちらかです。宝永二年(一七〇五年)の地図には、鎌倉古道の、鶴見川の所に、橋が書かれています。

2 地名の言われ

人間に名前があるように、それぞれの土地にも名前がつけられています。地名の言われは、はっきりしたわけが文書として残されていないので、こう考えられている。このような説がありますということになります。意味はかならずあるので、みなさんもいろいろ考えてみましょう。

町田 一つは、本町田あたりから田が開けはじめてきて、区画(町の意味)された田の土地という意味があります。二つには、市(イチ)からきたのではないかと考えられています。マチというのは、市の立つ所という意味で市町という言葉もあつたようです。町田は古くから市の栄えたところですが。

野津田 昔の文書に野津田を「野葛」と書かれていたところから考えると、つる性のつたが繁殖していたところからつけられたとも考えられます。

小野路 厚木(神奈川県)に小野の里という所があり、昔ここに国府(役所)が置かれてあつたそうです。府中に小野ノ宮という所があります。そこにも役所が置かれてあり、共に京から役人が来て治めていたのだそうです。その厚木の小野ノ里から府中の小野ノ宮に行く途

中の道だから小野路と名がついたとも言われています。鶴川 町田市ができる前の村名で鶴見川流域の小野路、大蔵、真光寺、広袴、能ヶ谷、野津田、金井、三輪の旧村が明治二十三年合併した時に鶴見川より鶴川としました。

新屋敷 江戸時代に新開地などに移り住んでつくった集落からつけられました。

中村 集落の中心となっている親村を中村といいます。あるいは、村の中ほどにあるので中村とつけたとも考えられます。

別所 本寺から離れて修行者が草ぶきの小屋をたて、それが一つの部落のような形になっている所です。

川島 川岸にそつた集落や地続きの田んぼ。

綾部 京都に綾部市があり、ここは製糸織物が盛んです。その技術を伝えた秦氏の部族から分かれて全国に配置されたその一つではないかと考えられています。

袋 袋という地名は、鶴見川の流れがまがりくねって、袋のような土地をつくったことから名づけられ、しめり気が多く、水田に利用されています。

丸山 丘陵の地形が円墳状に丸く見える山になっていたたり、台地状になっている地形のところでは。

3 史跡

〈自由民権の碑〉

今から百年ほど前、石坂昌孝や村野常右衛門を中心として、自由民権運動が盛り上がりました。明治の文学者北村透谷は、この自由民権運動に参加し、石坂昌孝の長男公歴と親しくし、また、長女美那と結婚しました。そして、詩人、思想家として活躍しました。その自由民権と、透谷文学に深く、かかわりのある地として、この碑がたてられました。



自由民権の碑

〈石坂昌孝の墓〉

一八四一年(天保十二年)～一九〇七年(明治四十年) 野津田村出身で、自由民権運動の中心人物となり、政治結社を結成する。後に衆議院議員や、群馬県知事にもなって活躍した人のお墓です。



石坂昌孝の墓

〈野の仏〉

・地蔵尊

お地蔵様は、村のあちこちにあり、人々のいろいろな、お願いをきいてくれると、いわれています。町田には、江戸時代のころからのものが全部で一三七基ほどあるそうです。

子育て地蔵、とげぬき地蔵、いぼとり地蔵、延命地蔵など、いろいろなお地蔵様があります。



六地蔵(万松寺近く)

・野津田の地蔵

石坂昌孝の長男「公歴」と、そのいとこ、「恩孝」の学問成就を祈り、二人の母により建てられた地蔵です。

「未七月吉日、石坂恩孝母、公歴母」ときざまれています。

場所は、昌孝の生家と、養子先の家の、まん中にたっています。



丸山の地蔵

・道祖神

ふつうには「旅の安全を守る神」といわれ、旅の前、途中でおまいりしましたが、他にも「悪魔を、さえぎる神」とか、「農家の繁栄を守る神」などの意味があり、村の入り口あたりに置かれました。悪い病気の神様などが、村に入らないように、村はずれにたてられたそうです。

(別名 塞の神)



道祖神

・馬頭観音

江戸時代の中ごろから、馬を飼っている農民や、馬喰(馬の売り買いをする人)などの人により信仰されるようになりました。



馬頭観音

・庚申塔

庚申とは「かのえさる」とも読んで、昔の暦の読み方です。

この日の夜、人間の頭、腹、足に住む三匹の虫が、眠っている間にぬけ出して、天の神様にその人の罪を報告するという言い伝えがあります。ですからその日は、一晩中眠らずに、お祈りしたり、ごちそうを食べたり



庚申塔

・こうせん塚

小野路の台部落という所に、こうせん塚があります。こうせん塚は、コウセンバとも言われ、昔、コガシ(大麦を煎って、粉にしたもの)にむせて、死んだおばあさんがいたからとか、また、この場所には関所があり、関所通せんぼ、それがなまってコウセンバになったのだとかいろいろいわれています。



こうせん塚

があるので、ここには、「かせの神様」が、まつられていてかせをひくと、湯のみにお茶を入れて、おまいりにくるそうです。

〈小野路一里塚〉



小野路の一里塚

江戸時代には神社やお寺まいりが盛んになり始めました。そこで大山の阿夫利神社へのおまいりをする人も多くなり、大山街道もにぎやかになって、だんだん整備されました。三十六町(約四キロメートル)毎に一里塚がつくられました。右の写真

はその中の一つです。

他の街道の一里塚は松や杉等が植えてありますが、小野路の一里塚には榎が植えられています。昔は旅人の一時のいこの場であり、またその実で一時的飢えをしのいだともいわれています。

〈小野路城跡〉



小野路城の城あと

城山という所があつて城の跡があります。現在は天王様と言つて七月十五日には近所の人達によつて祭りごとが行われています。近くの人達は、蛇を退治した神様だといっています。この事については次の伝説があります。城跡に二つの祠があつたのを一ヶ所によせて、まつつたところいろいろと変わったことがおこり、病気もやはり困つたことがあります。そこでう

一つの祠は蛇の神様だったそうです。これを一緒にしたのでは無事にいくわけがないと考え、また別にしたそうです。今行ってみると、右後方二十メートルぐらいはなれた所に小さな祠があります。それが蛇の神様なのでしょう。

・小町井戸

万松寺に残されている書物によると、小野小町の伝説として次のような話がしるされています。

歌人であった小野小町が悪いできものになやみ、そのために神仏に祈り、千日この水をのみ、洗った末になおりました。その後、三人の子ができ、里となり、小野小町村と名がつけました。いつの頃からか小野路村というようになりました。

小町井戸は、小山田氏の小野路城の飲料水として使用されていたと言われています。



小町井戸

参議 篁

和たのほら
八十島かけて
こぎ出でぬと
人にはつげよ
あまの釣舟



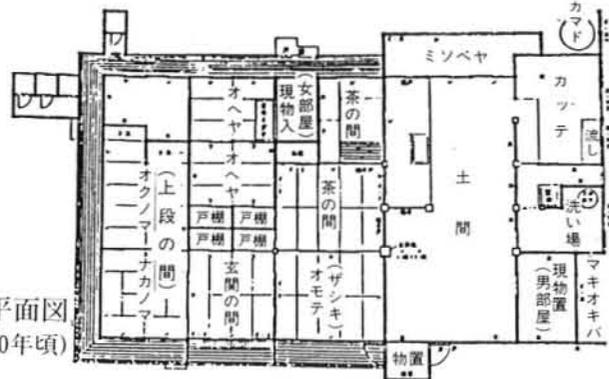
小野小町

花の色はうつりに
けりな
いたづらに
わが身世にふる
ながめせしまに



〈地域にのこされた古い建物〉

・小島家 (町田市小野路九五〇)



小島家母屋平面図
(昭和30年頃)

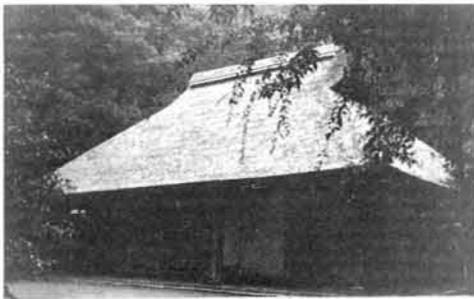
上の図は、天保十二年(一八四一年)に建てられた、旧小島家の様子です。母屋は、間口二十一・六メートル、奥行十二・六メートル、屋根の高さ十一メートルでした。オモテ、茶の間二部屋、式台のある玄関、オヘヤ二部屋、上段の間、中の間、奥の間、茶室、などがあり、座敷回り三方に、一メートルぐらいの縁がありました。その他、客用浴室、土間、男部屋、女部屋、風呂場、カッテ、カマド、ミソ部屋などがありました。しかし、昭和三十九年、現在の建物にたてかえられました。外から見てもわかりませんが、中に入ると上段の間や大黒柱は、昔のままのこっています。

・旧永井家 (薬師池公園内)



永井家

・旧荻野家 (薬師池公園内)



荻野家

永井家は、三百年も前に建てられたもので、江戸時代中頃の、農家のようなすが、よくわかります。窓が少ないので、家の中は暗く、天井板もありません。竹すのこの床で、冬は、とても寒かっただろうと思われま。土間には、独立柱があり、民家の形式の中でも、古い姿を残しています。一般の農家に比べ、大きな農家です。元は、三輪にありました。

荻野家は、百三十年以上前、江戸時代末期に建てられた医者の家です。外観は、平屋の入母屋造りで、屋根の合掌部分には、木の彫り物の飾りをつけた、かやぶきになっていきます。一般の家比べて品格もあり、用材も、良い物が使われています。うらには、杉の皮でふいた、風呂場と、便所が、突き出ています。

4 神社とお寺

鶴川地区には十以上の神社やお寺があり、昔から人々は、信仰深かったようです。この地区は山野田畑が他の地域よりも多く、豊かであったため、神社やお寺が多く造られたのでしよう。

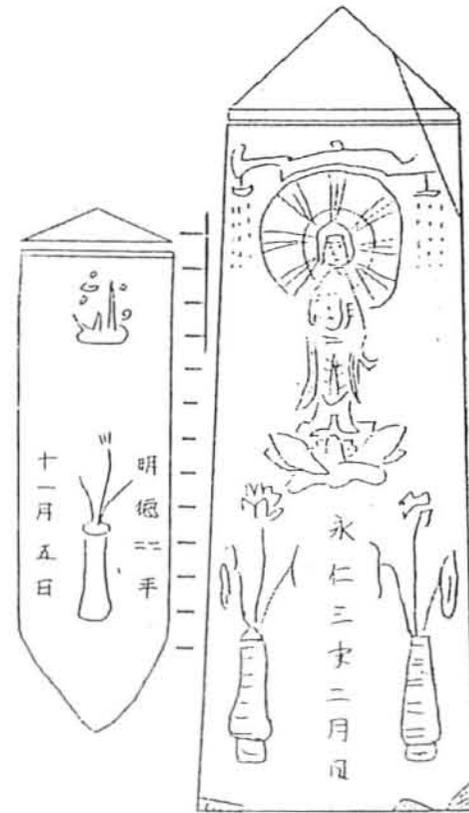


岩子山千手院

〈千手院〉

岩子山のバス停のすぐ近くにあるのが、千手院と言われのお寺です。千の手を持った「千手観音」が本堂（写真）に納められています。千の手で、苦しんでいる人々や悲しんでいる人々や病気をしている人々を救ってあげる観音さまです。このお寺は、江戸時代初期に、恵満というお坊さんが、それまで荒れはてていたお寺を、新しく建て直した（再興）と言われています。また、このお寺から「板碑」

と呼ばれる板に描かれた阿彌陀さまが、土の中から発見されました。造られたのは、古くて、千三百年（鎌倉時代）ごろで、小野路保育園の裏からもいくつか発見されています。当時の人々の信仰の深さがうかがわれます。本堂から山に向かって石だんを登ると奥の院が見えます。奥の院の中には、四十七センチメートル位の観音さまがあります。



千手院の板碑

〈小野(路)神社〉

小野路の宿と大山街道のぶつかった近くに、小野神社があります。五反田の方から信号機から二十メートルぐらい入った大山街道ぞいの右側にあります。



小野神社

小野神社はいつごろ建てられたかはつきりしませんが、今から五百年ほど前（室町時代）に造られたのではないかとされています。小野路を守るために建てられたのでしよう。

この神社を熱心におがむと「勉強ができる」と信じられ「勉強の神さま」とも呼ばれています。鳥居をくぐりぬけると、左側に鬼ごっこやなわとびができそうな広場があります。祭りの日は、九月十三日です。その日の近くの日曜日に行われています。千人以上の人々が祭りに参加し、おはやしも行われ、夜店も出て大変にぎやかです。おみこしは、大人用の大きい物と子ども用の小さい物と二つあり、三、四年前に造られた新しい物で、広場の左にある建物に納められています。この神社は、小野氏の祖神小野たかむらをまつつていいます。



小野神社のこま犬

石だんを登ると、社の前に石で造られた、二匹の「こま犬」があります。こま犬が神社を守る「守り神」なのでしょう。

〈万松寺〉

小野神社のすぐ近くの道を山に向かって小さな道があります。右側に孟宗竹がたくさん生え、大きな農家が数軒ボンボンとあり、その道の奥が万松寺です。小野神社から歩いて、五分ぐらいの所にあります。

こま犬の「こま」は、昔の朝鮮のことで、朝鮮の犬のことなのかもしれません。今から四、五百年前（戦国時代）にこの神社から持ってきたつり鐘が神奈川県逗子市にあります。小野神社に返してくれないので同じつり鐘をまたつくりました。



万松寺

このお寺は、今から、六百年ほど前に建てられたのではないかと言われている大変古いものです。

太平洋戦争当時、品川の小学生が、このお寺に疎開していました。疎開とは、戦争が激しくなったので、お父さん、お母さんと別れて田舎などに移り住むことです。もちろん、そこで勉強もしたのです。

昭和二十年の五月、東京の空しゅうの時に、この万松寺もアメリカの飛行機B29に焼夷弾を落とされほぼ全部焼かれたそうです。お寺の宝物や古い本や庭の柿の木なども焼かれてしまいました。焼かれてしまったことを今でも住職さんは残念がっています。庭には、町田市名木百選に指定された「カヤ」（イチイ科）の木があります。大人二人が手をつないでも回りきれないほどの太さで、三百年以上もたった大木です。



焼夷弾のあと

この大木は、焼けずに、無事残りました。

その時に落とされた焼夷弾のあとが、土蔵のかべにくっきりと残っています。十七センチメートルぐらいの穴が三つついていました。

品川の子ども達は、全員無事だったそうです。

〈野津田神社〉

田中入口のバス停の信号を葉師池方向に曲って、橋をわたり、百メートルほど歩くと葉師が丘入口の別かれ道があります。右に曲って坂を登ると、野津田神社が右側に見えます。

鳥居に入る左側に、日光で有名な三ざる（見ざる、言わざる聞かざる）がほられている庚申塔があります。

鳥居をくぐりぬけると、広場があり、左前方に、民権の森への入口があります。

この野津田神社は、古くは五社明神と言ったが、明治四十二



野津田神社

年に上の原の春日神社、本村の幸山神社、並木の伊勢神社、川嶋の御嶽神社を合わせて、新しく野津田神社と社名を変えたのです。祭りの日は、八月二十七日で、夜店も出、大変にぎやかです。社の左側には、民権の森の入口になっており、木々がたくさんしげって、自然にめぐまれています。この神社から、鶴川第一小学校などが見え、ながめもすばらしいものです。



華厳院

掃ったり人々の願いをかなえてあげ、たくさんのお話を残した人物です。境内の左には、「誓願の鐘」があり、自由に鐘を叩くことができます。願いごととなえて、鐘を叩くと願いごとがかなうかもしれません。

他にも、鶴川地区には、観泉寺、東光寺、浅間神社など十以上の神社やお寺が大切に保存されているのです。

〈華厳院〉

野津田車庫の手前、約二百メートルほどの所に、華厳院というお寺が芝溝街道ぞいにあります。

石だんを登って門をくぐると、右側に弘法大師の像が立っています。弘法大師は、全国各地を旅し、橋をかけたり、井戸を

弘法大師像



5 みんなのしせつ

小野路、野津田の周辺には、町の人々がくらしやすくするためのいろいろな施設があります。

① 鶴川市民センター 鶴川保健相談所

このセンターは、昭和六十年にでき、ホール・会議室などを備えた地域文化センターです。

また、支所としての役割も、果たしています。

保健相談所では、町の人の健康のために、予防注射や、健康診断が、行われています。

② 鶴川老人福祉センター

町田市内に住む、六十才以上の方なら誰でも利用できる憩いの場です。送迎バス「長寿号」も巡回しています。



鶴川市民センター



鶴川老人福祉センター

③ 鶴川郵便局

明治八年に、小野路郵便局として、開局し昭和十二年に大蔵へ移転して「鶴川郵便局」となりました。現在の場所に、移ったのは、昭和四十八年のことです。二万五千世帯の郵便を、とり扱っています。

④ 小野路浄水場

町田市は、水源に乏しく、水道の水の約九十四パーセントは利根川、多摩川の水が使われています。主に利根川からとられた水は、埼玉県の朝霞浄水場・稲城増圧ポンプ所などを通って小野路浄水場へ送られてきます。ここで、きれいな水は、小野路・野津田・藤の台・山崎・忠生方面に送られます。一日に約三立方メートルでこれは、町田全体の約三十パーセントにあたります。



鶴川郵便局



小野路の浄水場

⑥ 公園

学区のいろいろな所に公園があり、住んでいる人に、くつろぎの場を与えてくれます。

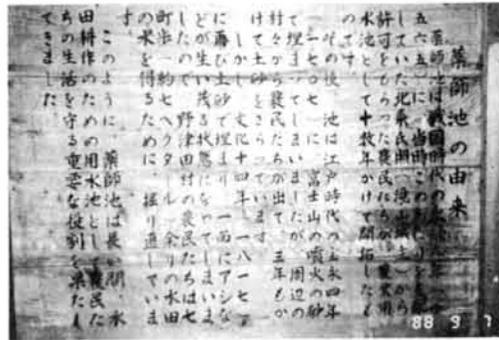
市の管理する児童公園としては、綾部児童公園・丸山児童公園・野津田野鳥児童公園などがあります。

● 町田市立薬師池公園

薬師池を中心とした、静かな緑におおわれた公園です。春は梅や桜が咲き、初夏は花菖蒲、秋は紅葉が楽しめます。薬師堂の裏を登ると、七国山の七国自然苑へと通じます。



薬師池



薬師池のせつめい

● 町田りす園

りす園は、市民が小動物と触れあえる憩いの場として、六十二年十二月に作られました。このリスは、タイワンリスで伊豆の大島から送られてきたものです。また、障害を持つ人達が、働いて社会参加するという目的も、合わせ持った施設でもあります。

⑦ 町田市立自由民権資料館

一八八〇年代に、町田を中心として、三多摩・神奈川県内に広まった、自由民権運動関係のものを集めた資料館です。手紙・本・写真類・当時の新聞・雑誌・また民権家の使っていた物などを集め、展示しています。全国でも、自由民権に関する資料館というのは、めずらしいものです。



まちだリス園



自由民権資料館

6 年中行事

〈年末・年始〉

年の暮れには、どこの家でも、大そうじをし、おかざりをつけて、新しい年をむかえます。また、お正月には切っても切れない食べ物として、おもちがあります。昔は、うすときねで、ベツタンコ、ベツタンコとついていたそうですが、今では、きかいてついている家が多くなりました。また、自分の家でつかないで、店で買う家がふえてきています。それでもまだ、それぞれの家でもちつきをする風習が多くのことっている地域と言えます。



お正月には、小野神社や野津田神社へ、おまいりする人が多くみられます。このお正月には、おみきがふるまわれたり、おはやしのたたき始めがあったりして、けっこうにぎわいを見せています。

小野神社、野津田神社とも、わたしたちの生活の中に、深く根づいています。現在でも夜中、除夜の鐘とともに、初まいりする人がたくさんいます。

五穀豊じょう(米・麦・あわ・きび・豆が豊かに実るように)と家内安全・交通安全などをおねがいするためです。

〈お盆〉

八月十三日はお盆の迎え日です。なすやきゅうりで馬や牛をつくりまします。夕方は家の前で火をたいてお線香をあげまします。仏様はこの馬や牛にのって、けむりといっしょに家に帰って来るといわれています。そのほかカヤで敷物をあみ、ささ竹を盆棚の四すみに立てて、柿、栗、あずき、さつまいもなどをお供えまします。竹には赤いほうすきなどをささげてお飾りをまします。

十四日、十五日は仏様をこの世の人がもてなす日です。お盆は農家にとってはお正月と同じように最大の休養日です。朝から、ぼたもちや、こんにやく、里いも、人参、ごぼうなどで煮しめを作ったり、又、小麦粉で酒まんじゅうをつくりごちそうをつくりまします。お昼頃から親せきの人々が集まり、よも山話に花を咲かせまします。そして、お坊さんが来ておとなえをしてくれます。町内で豊年踊り(盆踊り)を催したりもまします。



十六日は仏様が帰る日です。朝送り火をたいて、おとうぼや線香を持ってお墓に行ってお送りまします。なすやきゅうりで作った馬や牛などは、家の前や四つ角などの、安全な場所におきまします。

しかし、小野路地区では、十五日の夜に送り火をまします。

〈どんど焼き(さいの神)〉

お正月のお飾りや門松を、そまつにしないように十四日に道祖神の所に集めてどんど焼きをまします。ニワトコの枝を切り三本束ねて俵のかわりに神棚に上げたり、又、竹の先を数本に割りそれにニワトコの枝をさして積み上げた堆肥の上に建てまします。

稲穂、栗、ひえの穂がたれ下がる程、豊作であるように祈りをこめて辻をつくりまします。子ども達もお飾りやお札を集めまします。米の粉でまゆ玉団子を作り、三つ又の檜の木に紅白の丸団子を



どんど焼き(児童作品)

さしたものを持って、夕方になると集まします。寒い夜空に天高く舞う火にあたると一年間病気になるまいといわれ、又焼いた団子をたべると風邪を引かないといわれています。子ども達は書初めを焼き、天高く舞い上がれば字が上達するといわれています。焼けにくい棒を家の入口に立てると、悪い病気がどろぼうよけになるともいわれています。

団子はまゆ団子といって、よいまゆがとれるようにということで、神棚にも小さな枝にさして上げる家もありまします。

〈お地ぞうさまのおまつり〉

野津田の袋橋の近くに六地ぞうさまがあります。その近くに赤ちゃんにおちちをあげている子育て地ぞう様があります。

この子育て地ぞう様のお祭りの日は、十月二十三日です。



子そだて地藏

この日は、地いきの人たちが集まって、おだんごをおそなえし念仏をとなえます。また、おまいりした人たちに、お赤飯やおそなえ物をくばったりもまします。夜は、男衆が飲んだり食べたりして楽しくすごまします。

昔は、万才や落語をやつてにぎやかだったそうです。

三月のおひがんに、集まって念仏をとなえます。

〈野津田神社のおまつり〉

おまつりの日は、八月二十七日です。今では、おつとめをしている人が、ふえたため、八月末の日よう日ということになっています。

年番（その年の当番）にあたった町内の人たちを中心に、おまつりの計画をたてて、実行にうつすのです。

「田中・ぬく沢」「あやべ・袋」「川島」「丸山・本村」「並木」

の五つの町内があるので五年に一度、年番がまわってくるようになります。

のほりがたてられ、おはやしがきこえ、にぎやかに秋まつりが始まります。

野津田神社

夜は、夜店がならび、子どもたちの楽しそうすがたが見られます。

年によって、歌やしばいや、その他いろいろなもおし物が考えられ、一だんとおまつりをもりたてています。



「野津田神社のおまつり」

四年生の作文から

夕方になると、外の方からたいこや笛の音がひびいてきました。私たちは、家を出て野津田神社へ行った。いとこのおばさんや私のお母さんが、「先に、ぶたいでげきをやっているから見て行こうよ。」と言った。上に登って行くとおばあさんたちがござの上ですわってしんけんな顔でげきを見ていた。少しして夜店の方へ行った。

ヨーヨーやくじびき、たこやき、水あめなどいろいろ売ってました。わたしは、ヨーヨーを切れないようどきどきしながらとった。三つもとれた。

たこやきは二つ買った。一つはおじいちゃん、おばあちゃんの分だ。

その後、十円玉をおさいせんばこに入れて勉強がよくできるようにおねがいました。おねがいがかううといいなあとと思った。



野津田神社の夜店

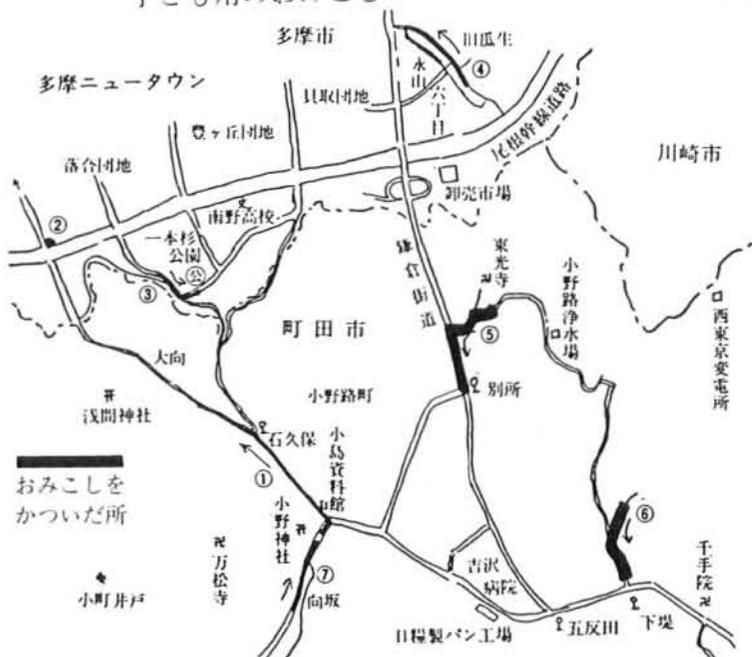
〈小野神社のおまつり〉



大人用のおみこし



子ども用のおみこし



小野神社では、九月十三日がおまつりです。たくさんの方が集まりおみこしをかついだり、夜店が出てにぎやかなのは、十三日より後の日よう日です。ただ、祭である神様に感謝したり、地域の人々の安全や豊作を祈る一番大事な例大祭の式は、九月十三日に行っています。この神社を祭り、守っていく家々を氏子と言います。小野路町には、約三百戸の氏子があります。この氏子を三つのグループに分け小野神社の祭りを交たいでうけもっています。

おみこしは、明治十六年に作られたものがありました。古くなって昭和になつてほとんどかつかれていませんでした。そこで、氏子や地区の人々がお金を出し合い、昭和六十年、今のおみこしを作ったのです。

この時、子どもおみこしもいっしょに作られたのです。

7 民話 伝説

〈身近かな生き物〉

昔、鶴川には、山や野原などが多かったので、むじな（タヌキ）、キツネ、ゴロスケ（ふくろう）、イタチなどがたくさんいました。これらの動物が、人々の生活と深いかわりをもっていて、民話に多く登場します。

むじな

お月さまを

西からあげて

ポトンと

山に落とす。



〈きつねのちようちん〉

昔のよめとりと言えば、夜が明けるものと決っていたようです。昔の結婚式が、なぜそんなに、おそくなったのかというとおむこさんの方で、まず、およめさんの家まで、むかえに行くのだそうで、それも五人とか七人とか、人数をそろえて行かなくてはならないようで、みんなそろうまでに時間がかかり、むかえの出発がどうしても、午後二時ごろになってしまいます。

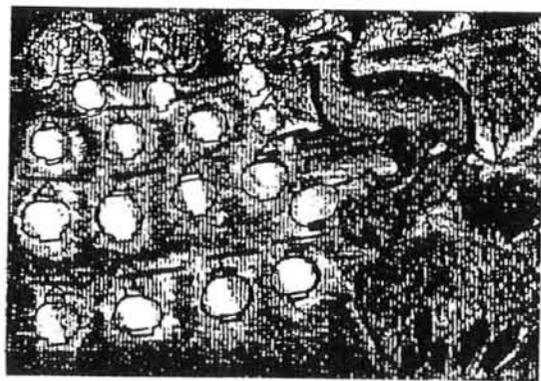
そして歩いておよめさんの家に行き、そこでまた、およめさんの家に関係のある家々を一軒一軒あいさつしてまわってから、およめさんを送って行く人も加わり、よめいり道具は、荷車につんだり、かついだりして、やっと、よめいり行列となるわけです。

その時は、もう午後五時か六時ごろになっていたそうで、暗いのでちようちんをつけて出かけなければなりません。お祝いのしるしに、家の紋を入れたちようちんをつけていくのが、しきたりになっていました。

はたらきものくらさんが
こった村（今の多摩市）から、
小野路村へおよめに来る
ことになりました。

こった村から、小野路村へ
来る道中、ヤキバがありました。

ヤキバというのは、そのころ、
伝せん病でなくなった人
を火葬にする所で、それは、
それは、さびしい所でした。



くらのさんの花よめ行列が、そのヤキバにさしかかった時です。
「あーっ。」

行列の人たちは、立ちどまりました。

西北の方、五、六十メートルの山の中に、それはみごとに、
たくさんのちようちんがついているではありませんか。

大ぜいの人が、ちようちんをつけて歩いていくように
いくつもいくつも、ついたり消えたりしています。

道のある所だろうと、畑の中だろうと、山の中だろうと
あたりかまわずついたり、消えたりしているではありません
か。

行列の一行は、この見事なちようちんに、ただただ見とれて
しまっていました。

するとだれかが、

「ごちそうに、気をつけろ。」

「きつねだぞ。」

と、さげびました。みんなは、ハッととして、いっせいにごち
そうに目を向けました。

すると、ちようちんの火は、一時にパッと消えてなくなって
しまいました。

「ああ、ごちそうは、無事だった。」

「きつねのやつ、せつかくのごちそうが食べられなくて、
さんねんがっていることだろうよ。」

「それにしてもみごとなちようちんだったなあ。」

およめさんの行列の人たちは、口々に言いながら、小野路の
おむこさんの家へと急ぎました。

天狗やオオカミ

昔から恐れられている、天狗やオオカミもここでは、人々の
味方であり、親しみ深いものとして語られています。

〈天狗さま〉

小野路のせんげん様のおみたらしに、清らかな水が流れてい
ました。

ある日、子どもが水を飲みに行つて、ふと見ると、その水が
まっ赤になっていました。びっくりして上を
見ると、木の上に天狗様がいらつしや
いました。まっ赤な顔をして…。

時おり、姿は見えないけれど、天
狗様が、かやぶき屋根に使うかやを
せつせと運んでくださいました。

「たくさん運んだからやめてください。」
と、言うと、やめてくれました。

そのかやで屋根ふきができたというものです。



〈おくりオオカミ様〉

山の中におね道があり、その細い道が十字路になっている所に、おくりオオカミ様がおられました。

一人で歩いて帰ってくると、ぞうりのかかとをふむのです。ぞうりのかかとをふまされると、前へつんのめって、ころんてしまします。そこで、三尺（およそ一メートル）くらいのへこおびを、こしにまきつけて歩きます。そうすると、そのへこおびをふんで、ぞうりをふまれないから、ころびません。

やがて、自分の家が近くなってくると、「うちが、もうすぐそばですから、ありがとう」と言うと、おくりオオカミ様は、帰ってくれるのでした。

〈お地ぞうさま〉

野津田の袋橋の近くにいろいろなお地藏様が、たっています。これは今から、約三百年位前から建っているものと考えられます。お地ぞう様は、子どもをお守りくださる仏様として、信仰されています。そのお地ぞう様にまつわるお話です。

〈おちちのお地ぞうさま〉

昔の赤ちゃんは、みんなお母さんのおちちで育ちました。もし、お母さんのおちちが出なければ、赤ちゃんは、死んでしまいます。そんな時は、近所のおちちの出るお母さんから、も

〈野津田の村じまん〉

生まれ育った「おらが村」をほこりに思い、自まんしたくなる気持ちは、今も昔も変わりません。

野津田地区に残っている自まん歌を紹介しましょう。

野津田の自慢は	なんだんべえ
石坂昌孝だしたこと	
村野代議士立てたこと	
小さくも	会社の有ること
三百に足りない戸数でも	
水車が三つに	
寺一つ	
駐在所に	薬師に
ぼーぼ水	

(注) 会社

このあたりは養蚕がさかんで、田中のあたりに、生糸を組んでひもを作る会社があった。

ぼーぼ水
水源は丸山谷戸、本村谷戸の幸山神社の山より流れる水で、芝溝街道の通行人、牛や馬ののんだわき水。

らいちちをするのです。でも、そんなにおちちのよく出るお母さんがいるとは限りません。そこで、赤ちゃんのいるお母さんは、自分のおちちがよく出るようにと、神様や仏様をお願いするのです。

ある時、世田ヶ谷の方からお参りに来た人がいました。この人は、おちちが少ししか出ないので、赤ちゃんはいつもおなかをすかして泣いていました。野津田のこのお地ぞう様に、お願ひすれば、おちちが出るようになると聞き、お参りにやってきました。このお母さんは、お地ぞう様にお願ひをして、野津田のお米を一週間分借りて行きました。お母さんは、一週間、肉や魚をやめ、米と野菜だけの食事をしました。そうしたところ、おちちがよく出るようになり、赤ちゃんも元気になりました。お母さんは、借りたお米と、自分の家でとれた野菜などを持ってお礼参りに来たと言っています。

このように、野津田のお地ぞう様のことは、人から人へと伝わっていきました。このお地ぞう様にお願ひすれば、おちちがよく出るようになります。ということで、おちちのお地ぞう様として、遠くまで知られるようになりました。



子育て地藏

ひと昔前まで、小野路、野津田には、ほたるのとびかう所がありました。夏の夕方、ほたるがとぶのを竹ぼうきでとりました。その時、歌った歌を、紹介します。

ほたるとりのうた

ほっほっ ほたるこい
 ほたるどんの よめどりは
 おちようちんも いらぬ
 あんどんも いらぬ
 おしりの光で
 びっかり きやつかり
 飛んでこい



わたしたちが調べた

8 学区の産業

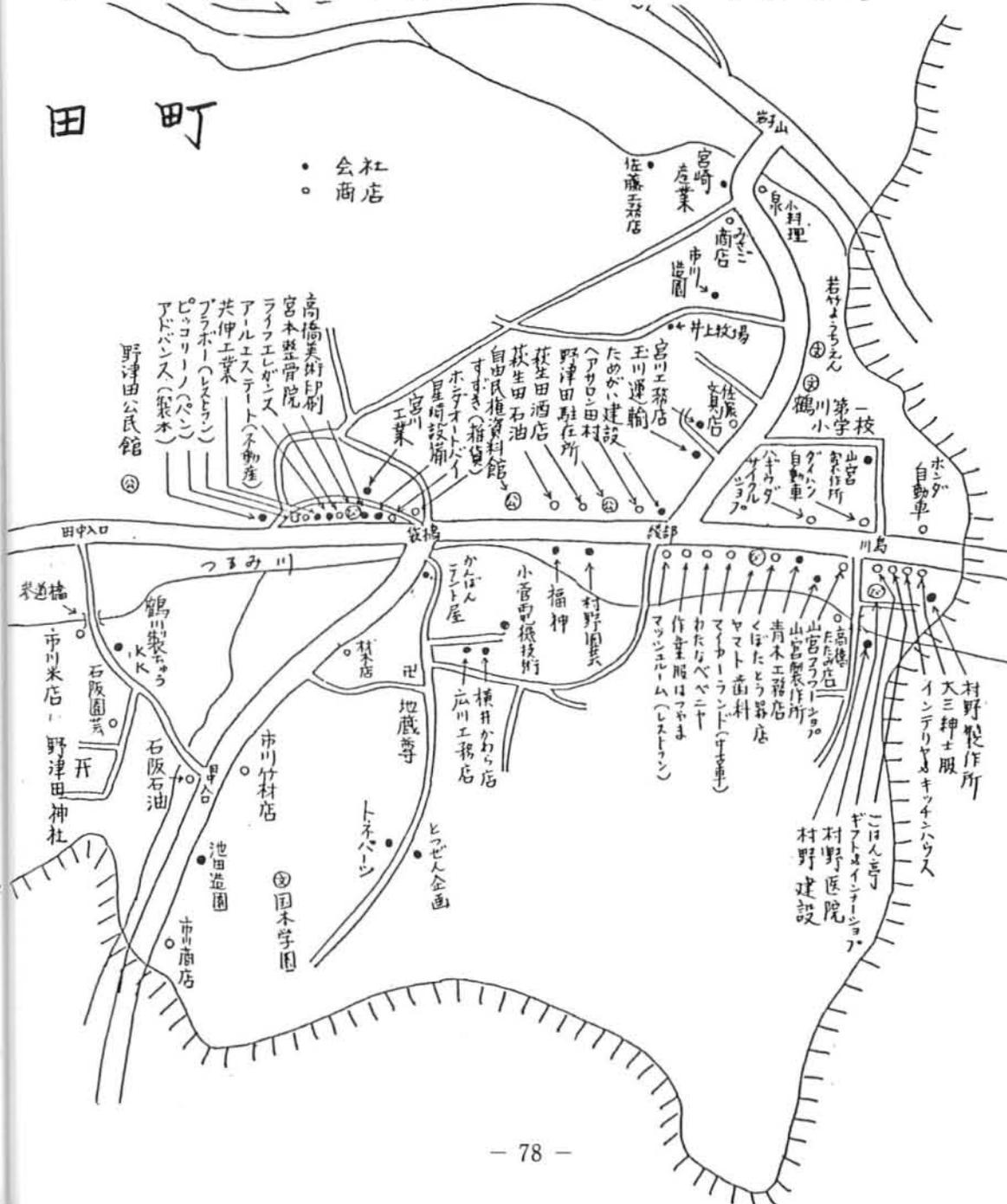
昭和二十五年のころの資料を調べると、野津田町、小野路町の商店の数は、それぞれ六けんと四けんだけだと先生が教えてくださいました。

今の町のようにすくらべると、その数の少なさにみんなびっくりしました。

わたしたちの学区は、町田市の中でも、まだ自然が多く残っている所ですが、近年はとみに開発が進み、町のように思われず。

そこで、わたしたちは、鶴川第一小学校創立八十周年の年に、学区の産業を記録に残そうと話し合いました。

グループで手分けして、会社



野津田町

商店の数や、作っている物、売っている物、働いている人の数などについて、足を使って調べてまわりました。

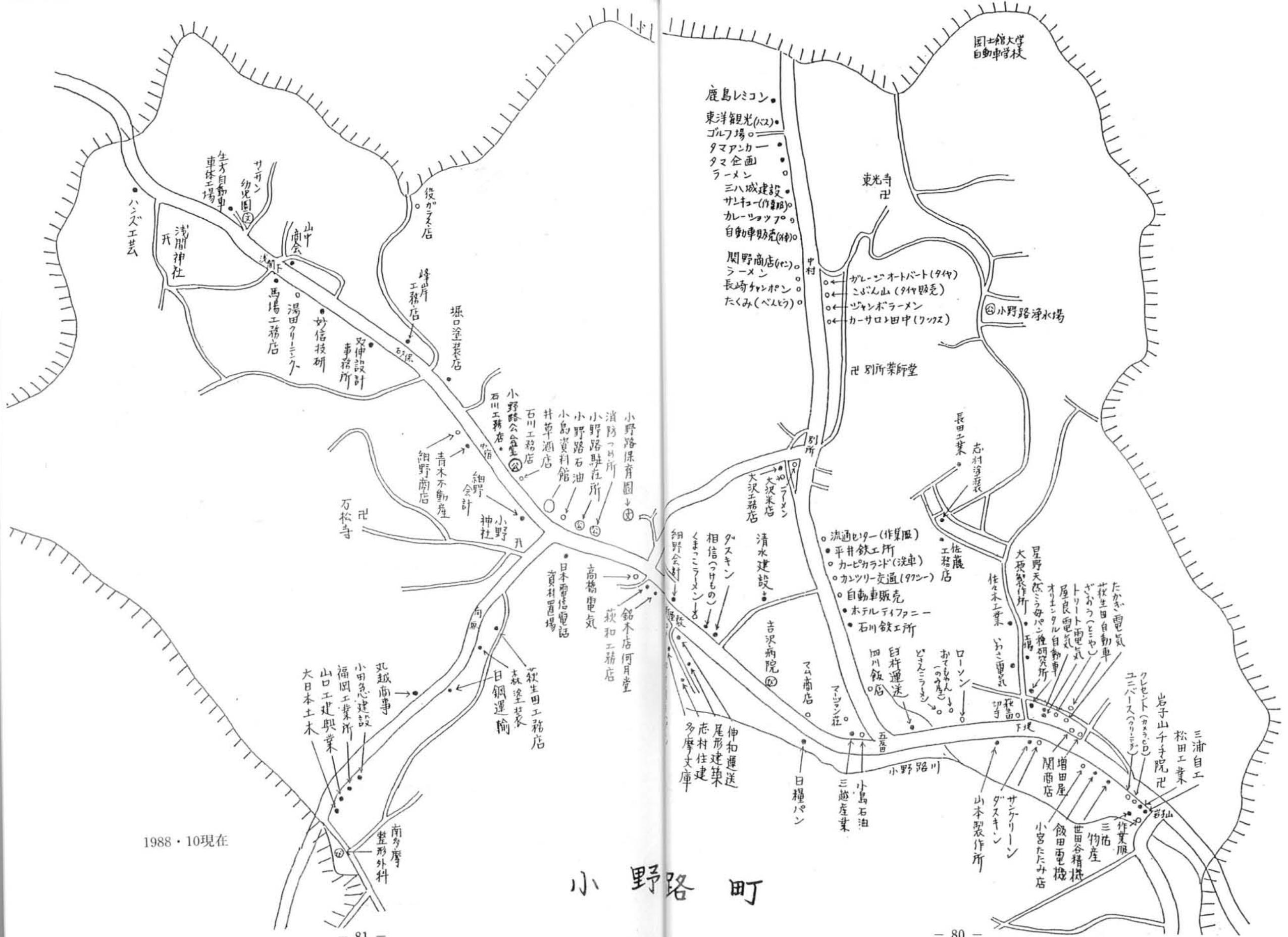
その調べたなかの一部を、八十周年の記念誌にのせました。

研究グループ

昭和六十三年度

五年二組 (三十一名)





- 鹿島レコン。
- 東洋観光(バス)。
- ゴルフ場。
- タマアンカー。
- タマ企画。
- ラーメン。
- 三八城建設。
- サニキョ(作業服)。
- カレーショップ。
- 自動車販売(特)。

- 関野商店(パン)。
- ラーメン。
- 長崎ちゃんぽん。
- たくみ(ペムロ)。

- カレ-ジオートバ-ト(タイヤ)。
- こぶ山(タイヤ販売)。
- ツジャンボラーメン。
- カーサロ田中(ワックス)。

- 流通センター(作業服)。
- 平井鉄工所。
- カービカラボ(洗車)。
- カンツリ交通(タクシー)。
- 自動車販売。
- ホテルダイヤニー。
- 石川鉄工所。

1988・10現在

小野路町

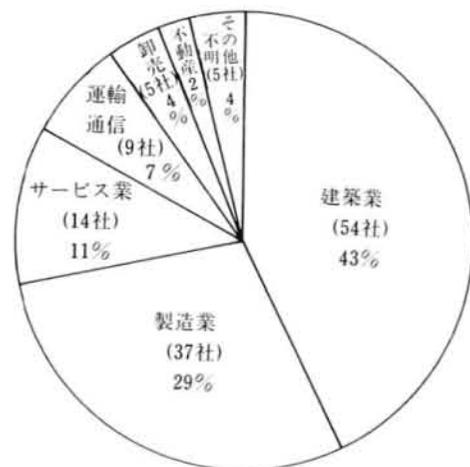
学区の産業別数

	野津田町	小野路町	学区全体
会社	70	63	133
商店	52	42	94
学校	7	2	9
公的機関	3	4	7
病院	3	2	5
寺院	1	3	4
神社	1	2	3

◎調べてわかったこと

- 会社のほうが商店より多かった。
- 大きな街道にそって、会社や商店がならんでいた。
- 学区の中でも、会社、商店がたくさんある地区とない地区があった。
- トキナ光学のような大きな会社の周りには関連する小さな会社がいっぱいあった。
- 学校が思ったよりたくさんあった。
- 産業調べをして、こんなところにも、こんな会社や商店があるんだなと思って、とてもためになった。
- 学区の広さにあらためて、びっくりした。

会社の業種別割合



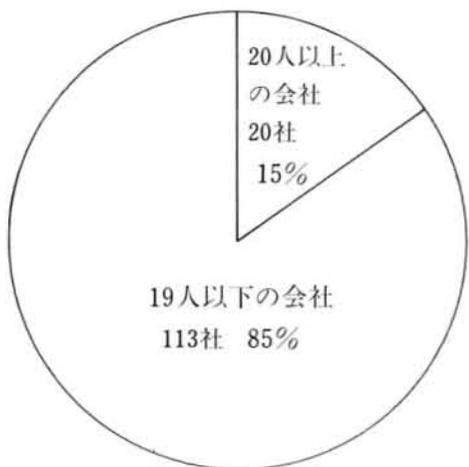
◎調べてわかったこと

- 建設会社、工務店など建築関係の会社が多いのにびっくりした。
 - 電気部品を作る小さな会社がいっぱい多かった。
 - いつも見ても何を作っているかわからなかったのが、調べてわかった。
 - 会社の人親切に教えてくれたことがうれしかった。
- ◇ ◇ ◇
- 飲食店が多かった。特に小野路のほうはラーメン屋が多かった。
 - 交通量の多い街道そばには自動車関連の商店が多かった。
 - コンビニエンスストア風の雑貨店がふえてきている。
 - 一、二人で仕事をしている小売店が多かった。

働いている人が二十人以上の会社

No.	会社名	仕事内容	従業員	地区
1	神奈川中央交通	旅客運送	三五八	野津田
2	トキナ光学	カメラのレンズ	二〇二	野津田
3	日糧パン	パン	二〇〇	小野路
4	小田急バス	旅客運送	九八	野津田
5	相信	食品つけもの	六〇	小野路
6	コスモ精工	ビデオの部品	五〇	野津田
7	ダスキン(新屋敷)	掃除具レンタル	五〇	小野路
8	ダスキン(下堤)	掃除具レンタル	四〇	小野路
9	多摩文庫(角川)	製本	四〇	小野路
10	清水建設	建設	三〇	小野路
11	鹿島レミコン	セメント	三〇	小野路
12	白杵運送	貨物輸送	三〇	小野路
13	鶴川製ちゅう	ひも	三〇	野津田
14	都民生協	食品、雑貨卸売	二六	野津田
15	五智	かんそう剤	二二	野津田
16	福神	医薬品卸売	二〇	野津田
17	星崎設備	下水浄化槽	二〇	野津田
18	世田谷精機	カメラCD部品	二〇	小野路
19	とつぜん企画	広告	二〇	野津田
20	ライフエレガンス	食品配達	二〇	野津田

働く人が二十人以上と十九人以下の会社の割合



◎調べてわかったこと

- 神奈川中央交通で働いている人が三五八人もいるとしてびっくりした。
 - 大きい会社でも働いている人が少ないところもあれば小さい会社でも働いている人が意外と多いところもあった。
 - 二〇人以上働いている会社が三つもあった。
- ◎調べて見ると、十人以下で働いている会社がとても多かった。田や畑、緑の多い学区だと思っていたが、意外と大きい会社があることがわかった。
- 三十一人の児童が全員で直接、会社、商店を調べて回りました。とても広い学区のため、まだ見落した会社、商店があるかもしれませんが、大方の資料として参考にしてください。あれば幸いです。



「キンラン」
←き色

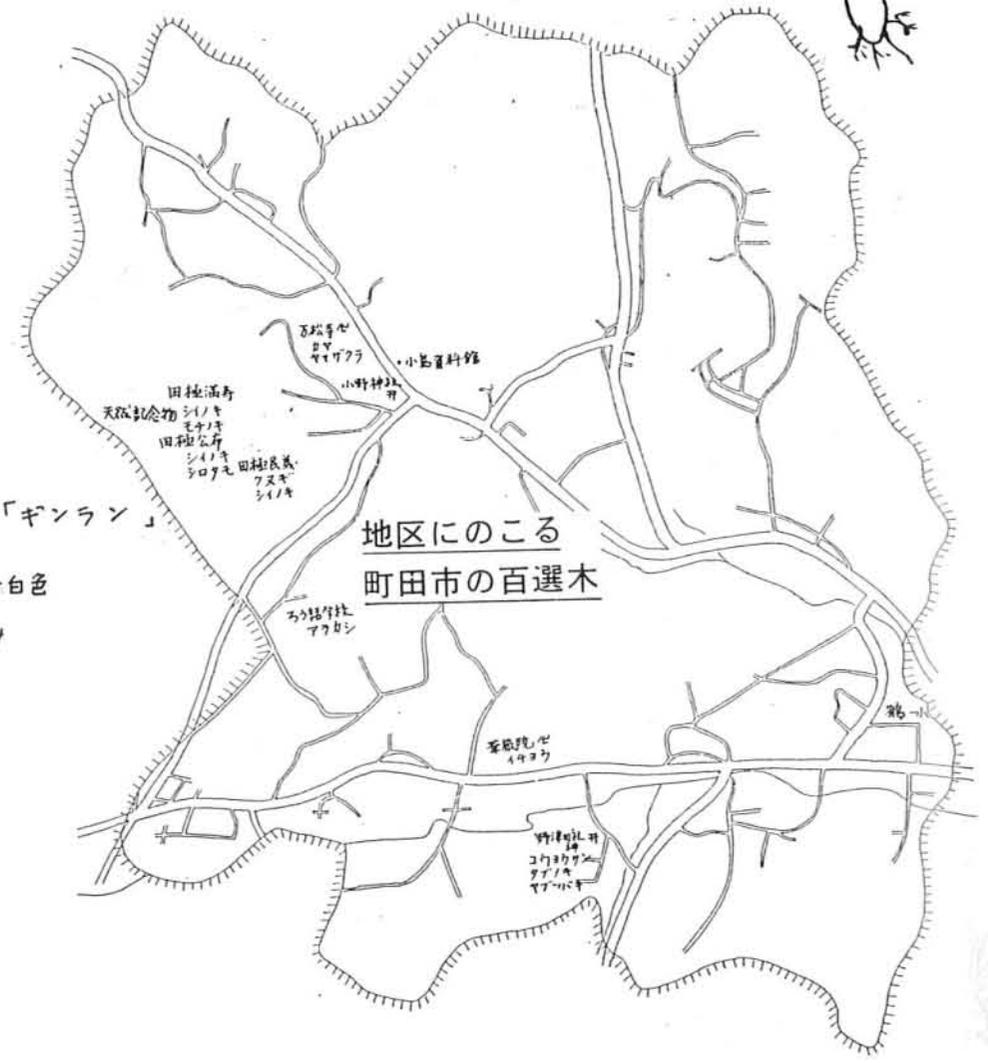
小野路 地区に
野津田
いつまでも
のこしておきたい
き ちょう
貴重な草花



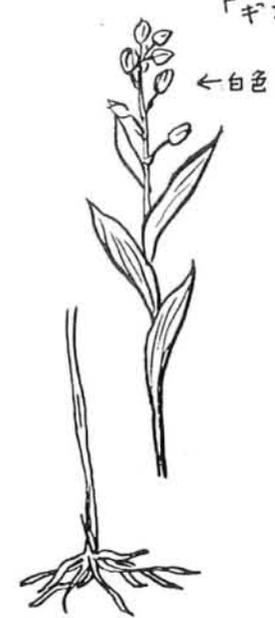
「カタクリ」

古い名をカタカゴとい
います。
かたむいたカゴ 萩
の花という意味。
下向きに咲き花弁が盛りか
ずから遠想したもの。
カタカゴ→カタコ→カタユリ
→カタクリと変化しました。

この球根からとれ
「デンプン」が
片栗粉です。



地区にのこる
町田市の百選木

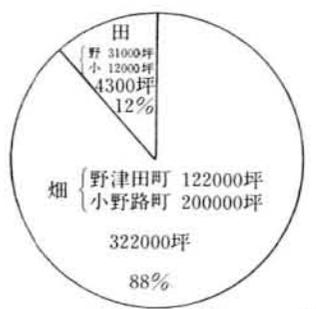
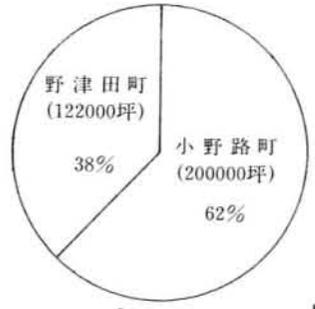
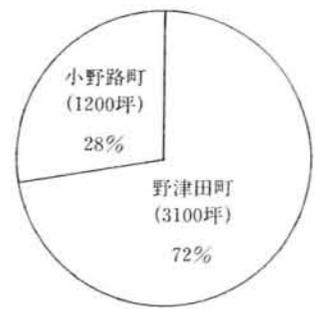


「ギンラン」
←白色

学区の農業

①農家の数(軒)	学区 218 けん	野津田町	95	専業	21
		小野路町	123	兼業	74
②農業従事者(人)	学区 647 人	野津田町	282	専業	41
		小野路町	365	兼業	241
③農地の面積(坪)	学区 365,000 坪	野津田町 153,000	田	31,000	
			畑	122,000	
		小野路町 212,000	田	12,000	
			畑	200,000	

(昭和60年度調べ)



④主な農作物

野津田町……いちご(特産物)米、なす、きゅうり、トマト
小野路町……ほうれん草(特産物)なす、かぶ、こまつな
専業・兼業の割合 田・畑の割合

※農業の学習は、鶴川農協の鈴木様よりご指導を受けました。

◎調べてわかったこと
・農家の数、農業をして
いる人、農地の広さなど、すべて小野路町の方が多
い。
田は野津田町に多く、畑は小野路町に多い。
・農地がだんだんへって
きている。

おめでとう 八十周年

学校教育目標

子 子 子
う る な
あ る な
け え 気
助 考 元

校歌

作詩 石森延男
作曲 下総皖一

一、すくすく立てる まなびやの
かしの木のこと われわれも
強く育てん このからだ
日かげあびつつ うるわしく

二、まともに見ゆる 富士山の
姿あおぎて この朝も
いよよ学ばん やしなわん
自律自由の 精神を

三、流れはつきぬ 鶴見川
つねに力を あわせあい
友よみがかん はたらかん
高きのぞみを いただきつつ

校歌について

校歌がつくられたのは、昭和二十六年です。このころ鶴一小は、今の鶴川中学校のある丘の上にあります。

校歌は、学校の「こころ」であることから、作詞、作曲とも日本で一流の入にたのもうということになりました。そこで、児童作家で詩人でもあった石森先生に。作曲は、上野音楽学校（今の東京芸術大学）教授の下総先生にたのみました。

石森先生は、①校歌はいつまでも学校に残って、よろこんで歌われるように。②卒業した後も歌われるように。③その学校の特色があらわれるように、このような考えで、校庭（丘の上）からまわりをじっと見たわたしたちそうです。

そして、目にやきついたので、すくすくと伸びたかしの木。富士山、鶴見川でした。このことをもとに立派な子ども達が育ってくれることを願って作詩したのです。



学校の一年



四月 入学式 一年生
春のひざしに64名の愛らしいひと
みが輝いていました。

六月 運動会 三年生
リズム「佐渡の鬼太鼓」みんな一
所けん命演技をしました。



七月 日光林間学校 六年生
中禅寺湖畔でのキャンプファイヤー。

九月 遠足 二年生
江の島でイルカとシャチのショーを
みました。



十月 八十周年、出し物づくり 四年生
むかし子どもたちが遊んだお手玉や
竹馬などをつくりました。

十一月 展覧会 五年生
お山のサルたちが好評でした。



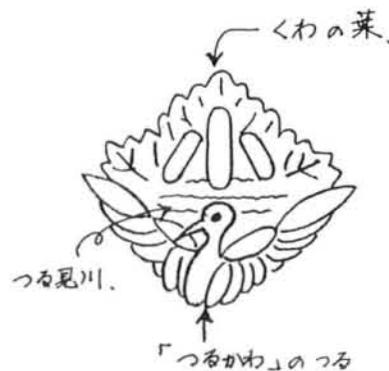
校旗



校章

校章について

ふだんはあまり気にとめていない校章ですが、学校の大事な
しるしです。校章が決められたころ、鶴川のあたりでも、かい
こ（養蚕）をかつている家が多く、このため、くわ畑がたくさ
んありました。このことから、「くわの葉」。近くを流れる鶴見川
の「川」。鶴川の「鶴」。小学校の「小」。をデザイン化してつくら
れたもので、大へん意味の深い校章です。



創立80周年行事関係 スナップ



むかしの学校のようす (六年の出し物)



学年の出し物



野津田のおはやし



夢をのせて高くまい上られ



本校児童も出演

PTAのあゆみと歴代会長

明治43年3月 第一回父兄懇話会を開く
戦後保護会となる

昭和23年 小菅朴二
・毎月一回散髪を行う
・文具配給

昭和24年 小菅朴二
・児童越冬対策として弁当暖め具設置
・ふとん作り
・給食視察

昭和25年 小菅朴二
・防空壕の穴埋め汗だくの勤労奉仕
・井戸建設
・図書購入のためバザー

昭和26年 小菅朴二
・農産物品評会
・通学路整備

昭和27年 小菅朴二
・校庭枝下し作業、池作り

昭和28年 小菅朴二
・映画観賞「山椒太夫」

昭和29年 北島寧静
・校舎落成記念大運動会参加

昭和30年 北島寧静
・廃品回収でバリカン、スベリ台購入

昭和31年 小島つね
・優良校見学

昭和32年 小島つね
・映画会「一人の母の記録」

昭和33年 小島 登
・部落懇談会
・校庭整備作業

昭和34年 小島 登
・講演会「しつけについて」
・会員有志による人形劇

昭和35年 小島宗市郎
・映画会「福沢諭吉の少年時代」

昭和36年 小島宗市郎
・給食準備基金として廃品回収
・部落を地区と修正

昭和37年 福室克己
・交通実態調査

昭和38年 福室克己
・地区懇談会

昭和39年 高橋光男
・廃品回収で児童用洋傘購入
・救急看護の講習
・父親学級



創立五十周年記念祝賀会参列者

昭和40年 増田敏澄
 ・講演会「学校教育と家庭教育」

昭和41年 増田敏澄
 ・移転準備梱包作業・植木移植作業

昭和42年 細野尚
 ・体育館下にヒューム管遊具設置

昭和43年 細野尚
 ・都立普通高校設置促進会、都へ陳情

昭和44年 上田千枝
 ・岩子山バス停の待避所設置

昭和45年 小島崇市郎

昭和46年 細野俊子
 ・交通事故防止の標示板取付け

昭和47年 内山二三夫
 ・体育館落成式に協力

昭和48年 小野レツ
 ・家庭教育学級

昭和49年 萩生田幸子
 ・親子プール(二日間)

昭和50年 萩生田幸子
 ・給食試食会 ・自転車安全教室

昭和51年 萩原康好
 ・地区別子供会リーダー講習会

昭和52年 萩原康好
 ・歴代PTA会長の写真入り資料作成

昭和53年 森屋みさ於
 ・野津田、小野路、大蔵地区別交通安全教室
 ・鎌倉史跡めぐり

昭和54年 永井卓実
 ・給食車誘導交通整理

昭和55年 鈴木富貴子
 ・市長を囲み給食試食会
 ・七宝焼講習会

昭和56年 小菅貴子
 ・野津田公園建設計画に伴う通学路確保のための署名陳情

昭和57年 青木和子
 ・学級活動活発化のためPTA規約改正

昭和58年 金子仙太郎
 ・講演会「子どもが見える」
 ・「子どもの買物」実態調査

昭和59年 小菅貴子
 ・通学路整備についての陳情
 ・講演会「よい子を育てる」

昭和60年 青木和子
 ・ファックス購入のためアンケート調査
 ・通学路点検

昭和61年 東海林 勤
 ・講演会「輝け子どもたち」
 ・料理講習会

昭和62年 東海林 勤
 ・ベルマークで「太鼓」購入
 ・40人学級署名協力
 ・講演会「子どもを取りまく環境は、どのようになっているか」

昭和63年 近藤安雄
 ・八十周年記念バザー
 ・八十周年祝う会協力
 ・ベルマーク「一輪車」購入
 ・講演会「魅力の女性讃歌」



(やっと買えたぞ。うれしいね。)



太鼓購入(ベルマークで)



(どれにしようかな。)



(これ、いいね。)

みんなでがんばったバザー(80周年記念P・T・Aバザー)



「PTAの歌」に合わせて楽しいダンス(創立50周年運動会)





- | | | | | |
|-------|------|--------|-------|-------|
| 菅 教諭 | 山本教諭 | 宮本教諭 | 渡部主事 | 松本教諭 |
| 古和田教諭 | 松嶋教諭 | 天正教諭 | 矢澤主事 | 金子教諭 |
| 波田野教諭 | 富田教諭 | 今成主事 | 石川教諭 | 山野辺教諭 |
| 小島教諭 | 中島教諭 | 瀬尾教諭 | 林 主事 | 千葉教諭 |
| 舟生教諭 | 富田教諭 | 浅田(警備) | 花岡主事 | 郡 教頭 |
| 玉田主事 | 稲葉主事 | 小山主事 | 長谷川主事 | 北澤校長 |
| 小島教諭 | 富田教諭 | 玉田主事 | 稲葉主事 | 針貝教諭 |
| 波田野教諭 | 富田教諭 | 舟生教諭 | 中島教諭 | 米原教諭 |
| 古和田教諭 | 松嶋教諭 | 小島教諭 | 富田教諭 | 藤原教諭 |
| 菅 教諭 | 山本教諭 | 古和田教諭 | 松嶋教諭 | 吉澤教諭 |

資料を提供してくださった方々・団体名

- | | | | |
|-------|---------|------|------------|
| 佐藤卓美 | 河井春作 | 村野和枝 | 小島資料館 |
| 増田助次郎 | 萩生田長吉 | 金子孝子 | 自由民権資料館 |
| 大谷和子 | 馬場米作 | | 万松寺 |
| 宮川義一 | 鈴木裕孝 | | 千手院 |
| 村野英夫 | 吉澤ヨネ | | 華厳院 |
| 城所貞義 | 吉澤タケ子 | | 鶴川郵便局 |
| 井上忠太郎 | 高橋治男 | | 鶴川市民センター |
| 石阪精一 | 内藤久子 | | 町田市役所 |
| 石阪至孝 | 八木千津子 | | 町田リス園 |
| 木下美千代 | 筑城ノリ | | 町田市商工会 |
| 大津千春 | 丸ちよ子 | | 本校五年二組 |
| 新倉和代 | 岩沢養江 | | 本校地区子ども会 |
| 中溝政江 | 市川正治・ツヤ | | 鶴川老人福祉センター |
| 田極公市 | 丸 清・ハル | | 町田市農協鶴川支店 |
| 近藤安雄 | 関野幸雄・つま | | 鶴川子ども郷土研究会 |
| 小島誠一郎 | 青木光子 | | |
| 飯田俊郎 | 森山邦男 | | |
| 高清水猛則 | 筑城夏江 | | |
| 浅井典子 | | | |
- 〈順不同・敬称略〉

主な参考文献

- | | |
|---------------|----------------|
| 町田市教育史 | 「町田市編」 |
| ふるさとの思い出(写真集) | 町田「白井國雄編」 |
| 町田市史(上・下巻) | |
| 鶴川村村誌 | |
| 町田の歴史をさぐる | 「町田市編」 |
| 町田の歴史をたどる | 「町田市編」 |
| 小野路・野津田を歩く | 「小島資料館編」 |
| 小野神社神輿 | 「小野神社神輿保存会編」 |
| 石阪昌孝伝 | 「渡辺 奨 著」 |
| 多摩の草花 | 「浅井民雄・浅井典子 共著」 |
| 長吉かたりぐさ | 「萩生田 長吉 著」 |
| 鶴川小学校日誌 | 鶴川小学校同窓会誌 |
| 鶴川村風土記 | 「鶴川小学校編」 |
| 町田地名考 | 「山岸義郎 著」 |
| 図説日本の歴史 | 「集英社刊」 |
| 東京百年史 | 「東京都編」 |
| 東京大空襲 | 「早乙女勝元 著」 |
| 日本の歴史 | 「中央公論社刊」 |
| 日本の歴史 | 「ほるぷ出版刊」 |
| 昭和の歴史 | 「小学館刊」 |
| 東京大空襲 | 「東京都教職員組合編」 |

あとがき

〔指導いただいた方〕

渡辺 奨 氏 (元忠生一小校長)
小島 政孝氏 (小島資料館館長)

〔執筆者〕

北澤 正直	古和田京子
郡 義之	吉澤 智子
中島 由紀	瀬尾 勇
山本 悟	波田野美津枝
宮本 忠彦	針貝 英一
富田 依子	米原 庸
松嶋 芳子	藤原 泉
天正 敦志	千葉 眞實
舟生あや子	山野辺富子
小島トミ子	金子 玉枝
石川 文博	松本 幸子
題字 北澤 正直	
表紙 版画クラブ	

鶴川一小開校八十周年の本年は、昨年に続いての校舎の大規模改修工事。八十周年を祝う数々の行事など多忙な年でした。このようななかで、八十年の学校のあゆみや鶴川の歴史を生ききとよみがえらせたい。形式的な記念誌でなく、子ども達が郷土学習に使える資料にしたい。写真を多くし、読みやすいものにした。こんな願いで校長先生をはじめとして全職員で執筆を分担しそれぞれの分野を研究しました。また、五月の家庭訪問期間中や夏休みを使って地区子ども会の活動や、個人研究として子どもたちにも地域を調べてもらいました。地域の方々も子どものいろいろな質問に快く答えてくださいました。まさに、子どもと教師と地域の方々力が合わせ作り上げた地域の副読本と言えます。しかし、完成後手にとってみる時、不十分な点も多々あります。また、歴史という性格と紙面の関係でむずかしい言葉も多くなり、低、中学年には少しむずかしい内容になりました。

尚、この本の製作にあたり、PTAによるバザー開催の収益から多大な援助をいただきました。厚くお礼申し上げます。

最後に資料を提供くださった方々、特に懇切なご指導をいただいた、郷土研究家の渡辺奨先生・小島資料館々長の小島政孝先生に深く感謝いたします。

〈石川記〉

平成元年
四月三日 受贈